14.4
575

愛媛縣勢要覽

愛媛縣總務部統計課編

昭和十四年

14.1
575

14,1
575

愛媛縣勢要覽

昭和十四年刊行

凡例

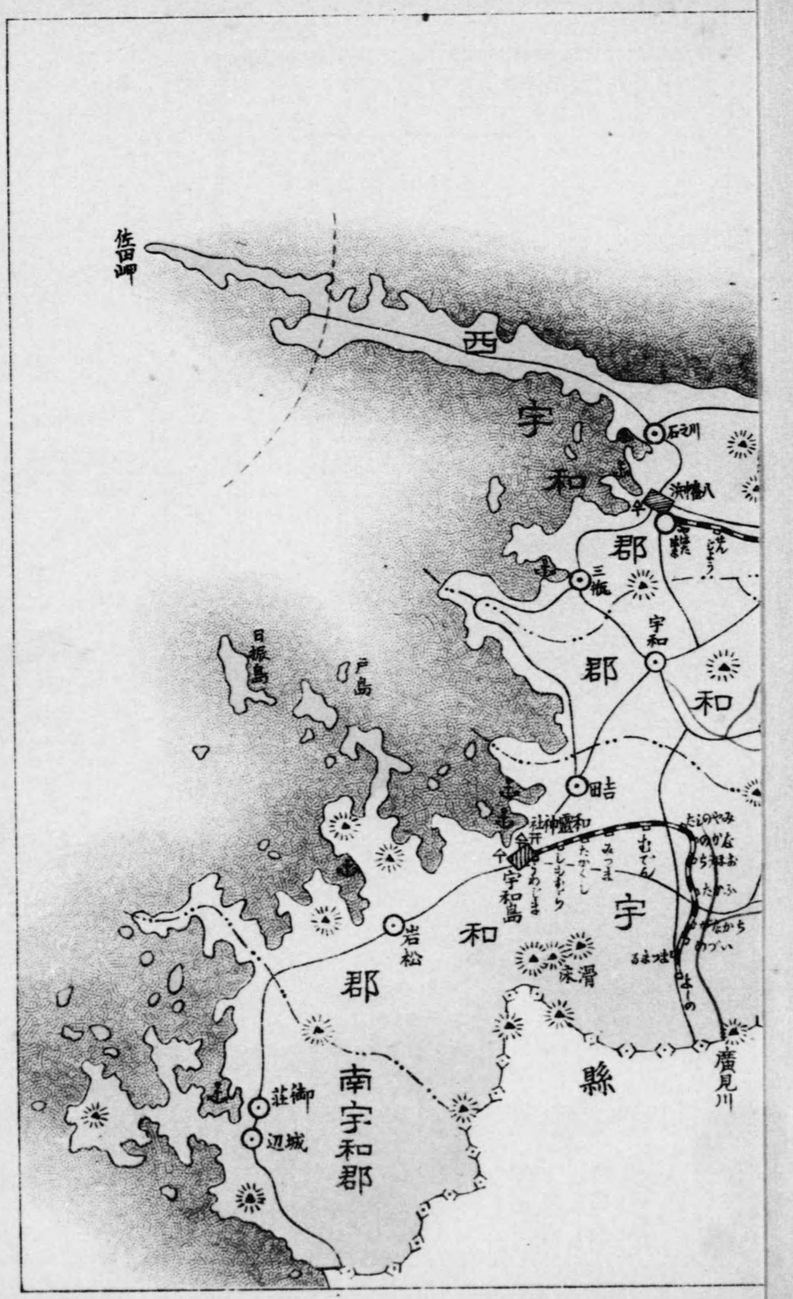
一、本書は本縣の現勢を統計上より觀て如何なる狀態にあるか又如何に推移せるかを表示するを本旨とす。

一、本書は可及的最近の事實に據る、而して主要事項に就ては全國又は他縣との比較を別記し本縣の現勢地位を一層明かにするに努めたり。

一、本書は史蹟名勝天然記念物等其の主なるものを集錄したり。

昭和十四年四月

愛媛縣總務部


佐田岬
西
宇
和
郡
三瓶
宇和
郡
和
日振島
戸島
田吉
和霊神社
宇和島
宇
和
郡
岩松
浜滑
縣
廣見川
南宇和郡
御荘
城辺

愛媛縣管內圖

昭和十年六月十七日　豫豫要塞司令部許可濟
昭和十年八月三日　呉鎮守府檢閱濟

凡例

國道
縣道
河川
山地
縣界
郡界
鐵道及停車場
電車軌道
市
町
縣廳
市役所
支廳
山頂
温泉
神社
寺院
港
歩兵聯隊
要塞地帶區域

14.4
575

愛媛縣勢要覽目次

地圖　本縣管內地圖

第一章　總說

位置及境界—地勢—地形—山嶽—河川—島嶼—地質—氣象—沿革—區劃—教育—交通—都邑—物產

第一節　土地

一、面積……一
二、國有地及民有地……五
三、林野面積……六
四、耕地面積……六
五、耕地整理……六

第二節　戶口

一、人口……七
二、戶數……八
三、戶數增減趨勢……八
四、人口動態（出生—死產—死亡—人口自然增加—婚姻—離婚—月別の出生、死亡、婚姻、離婚表）……九

第二章　神社宗教及兵事

第一節　神社及宗教

一、神社及神職……一〇
二、寺院佛堂及住職……一三
三、教會講義所說教所……一五

第二節　兵事……一五

一、壯　丁……一七
二、海軍志願兵……一七
第三章　教　育……一七
第一節　初等教育……一七
一、學齡兒童……一七
二、小　學　校—兒童—教員……一七
第二節　中等教育……一八
一、中　學　校……一八
二、高等女學校……一八
三、農業學校……一八
四、商業學校……一八
五、商船學校……一八
六、工業學校……一八
七、青年學校……一八
八、師範學校……一八
九、青年學校教員養成所……一八
十、職業學校……一八
第三節　高等教育……一九
一、高等學校……一九
二、實業專門學校……一九
第四節　其の他の教育……一九
一、盲唖學校……一九
二、各種學校……一九

三、幼稚園……一九
第五節　社會教育施設……一九
一、家庭實業學校……一九
二、松山夜間中學……一九
三、圖書館……一九
四、青年團……一九
第四章　産　業……一九
第一節　農　業……一九
一、農家戸數……一九
二、農産物……一九
三、畜産物……一九
四、副業……一九
第二節　蠶絲業……一九
一、桑畑……一九
二、養蠶戸數……一九
三、蠶種掃立數量……一九
四、繭……一九
五、蠶絲業……一九
第三節　林　業……一九
一、林産物……一九
第四節　水産業……一九
一、水産業者……一九

二、漁船……四一
三、沿岸漁獲物……四一
四、遠洋漁業……四一
五、水產養殖……四一
六、水產製造物……四一
七、製鹽……四二
第五節　鑛業……四二
一、鑛區……四二
二、鑛產物……四三
第六節　工業……四三
一、工場……四三
二、工產物……四三
三、電氣事業……四四
第七節　會社及金融……四四
一、會社……四四
二、金融……四五
第八節　產業諸團體……四六
第五章　交通及通信……四七
一、道路及諸車……四七
二、鐵道……四七
三、海運……四八
四、通信……四九
第六章　社會事業……四九
一、愛媛縣社會事業協會……四九
二、愛媛縣善鄰會……五〇
三、愛媛縣敎化聯盟……五〇
四、縣方面委員……五〇
五、救濟……五一
六、職業紹介……五一
七、公益質屋……五一
八、住宅組合……五二
九、公營住宅……五二
一〇、釋放人保護……五二
一一、託兒所……五三
第七章　財政……五三
一、國稅……五三
二、縣費……五四
三、市費……五四
四、町村費……五五
第八章　警察及衛生……五五
第一節　警察……五五
一、警察官署及警察職員……五五
二、犯罪……五六
三、火災……五六
第二節　衛生……五七

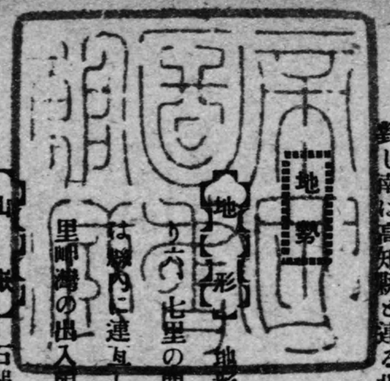
一、醫師及齒科醫師……六
二、產婆及看護婦……六
三、藥劑師及藥業者……六
四、鍼灸按術業者……六
五、傳染病……六

『附　錄』

史蹟名勝天然記念物概要……一
歷代長官……五

愛媛縣勢一覽

位置及境界　愛媛縣は南海道の西北部を占め東經百三十三度四十四分乃至百三十二度北緯三十四度十九分乃至三十二度四十八分に位す東は德島、香川二縣に接し西は豐後水道を隔て宮崎、大分縣に對し南は高知縣と連る北は瀨戸內海にして岡山、廣島、山口縣と相臨めり



地勢　地形狹長にして東北より西南に長く延長六十餘里に達すれども幅員は二十里より二十六七里の間を出入す南方は山嶽嶷々として障屏の如く土佐と自然の境界をなし其の支脈は縱橫に連亙し峯巒起伏して平坦地極めて少く山地八、平地二の割合なり海岸線延長三百十里岬灣の出入頗る多く就中佐田岬は遠く豐後水道に突出し其の長さ十二里に及ぶ

山嶽　石鎚山は海拔六千五百三十七尺にして四國最高たり其の他六千尺以上のものに二ノ森、瓶ヶ森、笹ヶ峯、筒城山あり多く土佐との國境に聳立す

河川　河川中最大なるものは肱川にして其の流程二十餘里其の下流十二里の間は舟揖を

通す物資運輸の便あるは縣下本川あるのみなり其の他重信川、加茂川、蒼社川、中山川等あるも僅に灌漑の用を爲すに過ぎざれ共一般河川は急流に富み近時水力發電に利用せらるゝもの多きを加ふ

島嶼 沿海大小の島嶼に富み其の數二百餘に達す大なるものに大三島、大島、伯方島、中島、興居島等あり

地質 南部石鎚山脈は結晶片岩帶より成り東方宇摩郡銅山川の溪谷より西方佐田岬に至る北部瀨戸內海斜面は白堊紀層、第三紀層、新生層、花崗岩地所々に連り概ね壤土質にして地味肥沃なり

氣象 氣温は地方に依り寒温乾濕の差著しく松山地方は平均攝氏十五度二にして最低零下四度三最高三十六度を示す一般に石鎚山系は寒冷甚しきも宇和地方は亞熱帶の感あり（西宇和郡三崎半島は亞熱帶の北限地なり）雨量は各府縣中瀨戸內海地方は少雨宇和地方は多雨の部に屬す

沿革 明治四年舊藩領を廢して倉敷縣を置く同年又松山、今治、小松、西條、宇和島、吉田、大洲、新谷の各藩を廢して夫々松山、今治、小松、西條、宇和島、吉田、大洲、新谷の各縣を置きたるも亦倉敷、松山、今治、小松、西條の五縣を廢して松山縣に宇和島、吉田、大洲、新谷の四縣を廢して宇和島縣となす、明治五年松山縣を石鐵縣に宇和島縣を神山縣に改め同六年神山石鐵の兩縣を廢して愛媛縣となす即ち伊豫の國を管轄するに至る明治九年讃岐を併管せしも同二十一年分離して今日に至る

區劃 縣內を五市、十二郡、三十三町、二百二十六村に分つ一支廳置かれ其の管轄區域內に二郡（北宇和郡南宇和郡）四町三十二村あり

教育 國家の要求と現下の國狀とに鑑み各般の教育に夫々努力すべき點を明示し以て實績を擧ぐるに努めたり、小學校に於ては一般不況による地方財政逼迫の影響大なりしが尙學級の增加せられたるもの內、教員定名を增加せり、實際の教育に於ては各種教育思想に眩惑せらるゝことなく常に中道を步みて地方振興の源動たる人間養成に努力し地方の教育は益々緊張度を加へ來れり

中等學校に於ては意志の鍛鍊、人格の陶冶に主力を注がしむると共に特に國民精神の作興、質實剛健、勤勞の風を養成するに努力せしめたり

青年學校の教育は制度の改正もあり最も重要なるを以て優良教員の養成には最も力を盡し青年學校教員養成所を獨立せしめ研究會、協議會、合同視察、教員及生徒の移動講習會等各種施設をなし學校當局を鼓舞激勵すると共に地方人士をして斯教育の重要性を理解せしむるに努めたるを以て成績は漸次向上し就學出席の狀況も極めて良好となりつゝあり唯地方財政逼迫の爲充分にはあらされ共專任

教員の新設、増置、設備の充實等次第に實現を見青年教育重視の聲は次第に高まりつゝあり

昭和十二年度に於ける公私立小學校 四三宅校にして 兒童 三四、八七八人 就學歩合 九九・六二にして前年度より稍高く小學校教員總數 五、一七二人にして本科正教員 四、四三一人（八割五分）を占め專科正教員 二六三人准教員一八人 代用教員 四五〇人なり

中等程度の學校は 四校にして生徒 一八、九五五人を有し卒業生 四、〇五一人なり、專門學校程度以上のものに官立松山高等學校、私立松山高等商業學校あり、其の他青年學校 三五校 生徒 四、八七九人 男女青年團數六七 團員數 八〇、一七一人なり不良兒感化の爲縣立家庭實業學校 一盲啞教育の爲縣立盲啞學校 一校あり

交通　地勢の影響に依り海運は夙に發達せるも 鐵道軌道の敷設は遲々として捗らず主要地の連絡は主として自動車便によりたるも最近に至り國有鐵道漸次南に進み玆數年にして縣下の鐵道貫通を見んとするに至れり

國有鐵道は香川縣に通ずる豫讃線縣内走行三一・六粁 及宇和島線五・六粁にして、宇和島線は昭和八年十月一日より私設鐵道宇和島鐵道を國有鐵道に移管したるものとす

私設鐵道伊豫鐵電のは經營せる松山附近と住友經營に係る新居濱端出場間とす

道路は國道一線 九七・九粁 縣道 三三線 二、七二八粁 市町村道 一〇、三四粁なり

海岸線出入に富み港灣多數を算し其の顯著なるものを揭ぐれば今治、高濱、新居濱、三津濱、八幡濱、宇和島港等にして阪神中國九州方面に毎日數回の定期航路備はり乘客物資の運輸至便にして交通繁し又昭和三年より今治、三津濱と大連間との航路開始せられ物資直輸入の途開けたり

都邑　松山市（人口八一、九四〇）に亞ぎて今治市（人口五一、六〇三）宇和島市（人口一三、八〇）新居濱市（人口三一、六〇四）八幡濱市（人口三〇、五〇〇）の五市あり、宇和島市は昭和九年九月一日九島村を合併したるものとす又八幡濱市は昭和十年二月十一日市制を實施し又新居濱市は昭和十二年十一月三日金子、高津の兩村を合併市制を實施したるものなり、其の他人口一万以上のものに三津濱（人口一八、五五五）西條（人口一八、三〇五）大洲（人口一六、二〇三）の三町あり（昭和十年國勢調査人口）

物産　本縣に於ける昭和十二年の物産總額は三億九千二百餘万圓にして其の中最も多きは綿織物にして年額五千二百万圓に達し主として今治、八幡濱、松山に產す亞いて綿糸四千九百三十万圓、米三千二百十八万圓、肥料二千五百七十三万圓、生絲一千二百三十五万圓、繭一千八十二万圓、麥一千二百万圓、其他清酒八百三十八万圓、染物四百九十二万圓、用材四百四十一万圓、木製品二百七十四万圓、菓子二百九十九万圓、製紙七百十四万圓、柑橘三百五十一万圓等を產す尙百万圓以上の產額にして著名なるものに金、銅、粗製硫酸、人造絹絲、木炭、イワシ、カマボコ、チクワ、醬油、

甘藷等あり

第一節　土　地

一、面　積　面積は五、六六七方粁二六にして全國中第二六位にあり全國平均の八、一三四方粁二三に達せずして三重、山口、千葉、愛知の諸縣に近似す

二、國有地及民有地　國有地は四三、一六〇町歩（昭和十三年四月一日）公有民有地三六九、五二四町歩（昭和十一年一月一日）なり國有地の內農林省所管四二、二五二町歩にして其の大部分を占め大藏省八一町歩鐵道省三五七町歩內務省二六〇町歩等を主なるものとす民有地の內有租のもの三三一、九八九町歩にして其の臺帳面に依る地目反別は次の如し

總數	田	畑	宅地	山林	原野	其の他
三三一、九八九町	四七、一七二町	五五、五〇二町	六、八〇七町	二二〇、九三〇町	七〇九町	八七八町

三、林野面積　每三年の定期調査による（昭和十一年末）林野面積は三一七、三九六町歩にして國有林四一、九九三町歩公有林五〇、一五三町歩社寺有林三、三四一町歩私有林二二一、九〇九町歩なり、內立木地九割無立木地一割の割合なり

四、耕地面積　昭和十三年末耕地總面積は九一、二五一町歩にして內田四五、九一二町歩畑四五、三三九町歩農家一戶當七反歩に當る、耕作する耕地の廣狹別を見れば五反未滿の戶數六八、〇二四戶、五反以上一町歩未滿三三、〇二四戶にして農家戶數一二六、六三〇に對し七割九分を占む而して一町歩以上三町歩未滿のもの一六、八五七戶、三町歩以上のもの三、二五三戶なり

耕地の移動狀況を見るに昭和十三年中に於ける擴張總數二七二町歩にして開墾二〇三町歩荒地復舊三一町歩地目變換三七町歩埋立及干拓一町歩とす、又同年中潰廢總數七三四町歩內田二五六町歩畑四七八町歩にして其の原因は宅地敷、道路河川敷、荒地、地類地目變換に依るものとす

平野の主なるものは道前平野（越智、周桑、新居の各郡及今治市、新居濱市）道後平野（溫泉、伊豫郡及松山市）三間平野（北宇和郡）等とす

耕地を自作小作別より見れば耕地總面積九一、二五一町歩の內自作田二〇、八八六町畑三四、〇五一町小作田二五、一八八町畑一五、四九四町にして自作の割合は概して南豫方面に多く小作の割合は東豫方面に多し

耕地面積（昭和十二年末）

全國	總數	六、〇九八、四三五町	愛媛縣	總數	九一、八二五町	德島縣 總數 三三、〇九八町
	田	三、二一七、九二八		田	四五、四九七	田 二八、二七五
	畑	二、八八〇、五〇七		畑	四六、三二八	畑 二四、八二三
香川縣	總數	五一、六七一町	高知縣	總數	六七、三八四町	
	田	三九、三九〇		田	三四、四九九	
	畑	一二、二八一		畑	三二、八八五	

五、耕地整理　明治三十三年耕地整理法施行以來昭和十二年迄に　設立施行認可せ　るものは地區數四三五　面積　二〇、〇九五町歩にして之が整理費　九、一〇五、四二九圓に達す

昭和十三年中に於ける認可地區數　三面積　六町歩　整理費　一三、九五〇圓　工事着手地區數　二面積　六町歩なり

第二節　戸口

一、人口　昭和十年國勢調査（十月一日在）に依る本縣の人口は百十六万四千八百九十八人にして五年前の昭和五年國勢調査に比し二万二千七百七十六人の増加なり内新居郡に於ける増加は一万四千六百十二人にして其の六割四分強を占む

大正九年乃至大正十四年の五箇年間の増加割合は人口千に付　四七人　大正十四年乃至昭和五年の五箇年間に於ける増加割合は人口千に付　三〇人にして最近増加割合著しく減少を示す

全國中人口は第二十七位に在り三重、山口縣に近似す

男女の割合を見るに總人口中　男　四割九分四厘　女　五割六厘を示し女百に對し男の割合は九十七人六分八厘にして全國平均百人六分二厘、香川縣九十九人五分七厘、高知縣九十八人七分四厘、德島縣九十八人七分三厘に比して稍々低し尚全國中其の割合最も少きは沖繩縣の九十人三分七厘、最も多きは東京府の百九人二分五厘なり

人口密度は全國中第十七位を占め一方粁に付二百六人にして全國平均百八十一人よりも高く四國四縣に於ては香川縣の四百三人に亞ぎて高し（高知縣　百一人　德島縣百七十六人）全國中密度最も高きは東京府の一方粁二千九百七十人、最も低きは北海道の三十五人にして岩手縣の六十九人之に亞ぎて低し

二、戸數　昭和十二年末現在戸數　三三、七八七戸にして内有職業のもの　九割六分七厘　無職業　三分三厘　に當る而して有職業中農業は最も多く總戸數の　四割七分二厘　を占め商業　一割六分九厘　工業　九分七厘　之に亞ぐ又兼業戸數は　七四、五二六戸にして農業　三、三七戸にして最も多く　商業　一〇、九五四戸　水産業　九、五三〇戸　工業　八、〇七八戸　等之に亞ぎて多し職業毎に大正七年末を百として最近五箇年間の指數を比較すれば次の如し

職業別増減趨勢（大正七年末を百とす）

		農業	林業	畜産業	水産業	鑛業	業工	業商	業交通	公務及自由業	其の他の職業	無職業	計
專業	昭和十二年末	九九・五	一六九・五	三六五・三	一三三・四	一〇八・六	九三・四	一二八・三	一三九・〇	一四五・三	二一一・五	一五九・三	一二四・一
	仝　十一年末	一〇〇・七	一六六・七	四〇六・一	一二三・一	一二三・三	九一・三	一二八・三	一二七・八	一四一・二	二一六・五	一二四・三	一二四・一
	仝　十年末	一〇〇・八	一六五・〇	四四〇・八	一一九・六	一二一・二	八八・六	一二四・〇	一二九・四	一四〇・四	二〇〇・〇	一七八・九	一二三・六
	仝　九年末	一〇〇・二	一四二・〇	三七七・五	一一七・〇	九六・四	八二・八	一二一・二	一四三・一	一三三・六	二〇〇・八	一六四・四	二一〇・四
	仝　八年末	一〇〇・五	一五五・〇	三三六・七	一二五・五	八八・三	七九・一	一二八・七	一二六・七	一二三・七	一九六・七	一六四・八	一〇九・一
	大正七年末	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

兼業	昭和十二年末	一三三・六	三六四・九	一、九七五・九	一二一・九	九八・二	六九・二	七八・五	一〇六・七	二二五・八	一〇九・六	—	一二五・四
	仝 十一年末	一三一・九	三五一・二	一、八二三・二	一二一・九	一〇三・七	六六・七	八〇・五	一一四・六	二〇九・八	一〇八・七	—	一二三・三
	仝 十年末	一三二・二	三三一・二	二、〇三三・五	一二一・二	八七・六	六三・六	七八・四	一一七・六	一八〇・八	一〇三・八	—	一二一・七
	仝 九年末	一三四・六	三一四・〇	一、四九三・六	一二一・九	七三・四	六二・五	七七・一	一一六・四	一七四・四	一〇五・六	—	一一七・八
	仝 八年末	一二七・二	二六一・九	一、三九六・一	一一四・七	五一・九	六一・〇	八三・四	一二九・五	一七一・四	一一四・八	—	一一四・〇
	大正 七年末	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	—	一〇〇・〇
昭和十二年（實數）	專	一一〇、三九五	六七八	一七九	一〇、七六二	三、〇五七	二二、五七九	三九、五七九	五、〇七二	一六、二八三	一七、四〇一	七、八〇二	二三三、七八七
	兼	二一、三一七	七、九〇二	七、一三三	九、五五〇	六〇二	八、〇七八	一〇、九五四	一、三〇二	二、九〇一	四、七七七	—	七四、五一六
大正 七年（實數）	專	一一〇、九四三	四〇〇	四九	八、七九二	二、八一四	二二、九五一	三〇、九六〇	三、六五〇	一一、二〇八	八、二四三	四、八九七	二〇四、八八七
	兼	一五、九五九	二、一六五	三六一	七、八三二	六一三	一一、六八〇	一三、九四九	一、二二〇	一、二八五	四、三六〇	—	五九、四二四

三、戸口增減の趨勢　明治二十一年末より昭和十二年末に至る四十九年間に於ける本縣現住戸數の增加は四万八千六百七十八戸にして明治二十一年末の十八万五千百九戸に對し二割六分二厘の增加を示す

人口は現住人口に依れば明治二十一年末九十万六千四百十四人に對し大正十一年末百十三万九千六百十六人にして（大正十一年末限り廢止）三十四箇年間に二割五分七厘を增す國勢調査の現在人口に依れば第一回（大正九年十月一日）國勢調査より昭和十年國勢調査の十五箇年間に十一万八千百七十五人を增したり而して增加の割合を見るに大正九年乃至大正十四年の五箇年間には四万九千六百四十六人にして人口千に付四十七人の割合を示し大正十四年乃至昭和五年の五箇年間には四万五千七百五十六人增加し人口千に付四十二人の割合なり尙昭和五年乃至昭和十年の五箇年間に於ては二万二千七百七十六人を增し人口千に付二十人の增加割合にして最近五箇年間の增加割合は著しく遞減せり又本籍人の出生死亡に依る最近一箇年の自然增加は二万四百一人の增加なるも之に比して前者その割合低きは移住來住等社會的移動に起因するものと認めらる

戸口增減趨勢表

	人口（十月一日現在）			戸數（年末現在）	
	實數	指數		實數	指數
		本縣	全國	本縣	本縣
昭和十三年	一、一七九、〇〇〇	一三〇	一八二	二三四、一九五	一二七
仝 十二年	一、一七四、四〇〇	一三〇	一八〇	二三三、七八七	一二六
仝 十一年	一、一六九、七〇〇	一二九	一七七	二三三、六七八	一二六
仝 十年	一、一六四、八九八	一二九	一七五	二三〇、七六二	一二五
仝 九年	一、一七八、五〇〇	一三〇	一七二	二二六、一八五	一二二
仝 八年	一、一六九、二〇〇	一二九	一七〇	二二三、五四九	一二〇
仝 七年	一、一六〇、〇〇〇	一二八	一六七	二二二、二二八	一二〇
仝 六年	一、一五一、〇〇〇	一二七	一六五	二二二、四二六	一二〇

仝　五　年	一、一四二、一三二	一二六	一六二	二三〇、四六一	一一九
大正十四年	一、〇九六、三六六	一二〇	一五〇	二一〇、七九五	一一四
仝　九　年	一、〇四六、七二〇	一一五	一四一	二〇四、二四九	一一〇
仝　七年末現在	一、一二四、七三六	一二四	一四五	二〇四、八八七	一一一
明治四十一年末現在	一、〇五四、九一〇	一一六	一二八	一九六、八〇一	一〇六
仝　三十一年末現在	九九五、四四一	一一〇	一一三	一九〇、九九七	一〇三
仝　二十一年末現在	九〇六、四一四	一〇〇	一〇〇（基準人口三九、六〇七、二三四人）	一八五、一〇九	一〇〇

昭和六年乃至昭和九年及昭和十一十二十三年の人口は統計局發表の推計人口に依る

四、人口動態

出　生　昭和十二年中に於ける本籍人の出生は 四六、三三〇人 にして前年に比し 二、九三八人 の増加を示し人口千に對する割合は 三九人五分 なり出生の體性は 男 二三、五五七人 女 二二、七七三人 にして女百に付男 一〇三人四分 を示す

死　産　昭和十二年に於ける死産は 一、五七七人 にして前年に比して 七二人 減少す人口千に對する割合は 一人三分 に當る死産兒の體性は 男 八四三人 女 七三三人 男女性不詳 二人 にして女兒百に對する男兒は 一一六人六分 にして其の割合高し

死　亡　昭和十二年に於ける本籍人の死亡は 二五、九二九人 にして前年に比し 七七一人 を増加す人口千に對する割合は 二三人一分 なり死亡者中男 一四、〇八六人 女 一一、八四三人 にして女百に付男 一二八人七分 の割合なり

尚昭和十二年に於て本籍人の出生死亡の差増は 二〇、四〇一人 にして人口千に付 一七人四分 の増加を示す

婚　姻　昭和十二年に於ける本籍人の婚姻は 一三、八〇三組 にして前年に比し 二、四八八組 を増す人口千に對する割合は 一一・七五 なり之が種類別を見れば普通婚姻 一二、九九四（九割四分一厘） 入夫婚姻 二二九（一分七厘） 婿養子婚姻 五一〇（三分七厘） とす

夫妻相互の婚姻當時の年齢を見るに夫妻夫々 一六歳より 五歳 括の區別に在りては夫 二六歳—三〇歳 と妻二一歳—二五歳との婚姻 三、二三〇にして最も多く之に亞ぎて多きは夫 二一歳—二五歳と 妻 一六歳—二〇歳 とのもの 二、〇七二なり

夫妻各自の年齢別より見れば夫は 二六歳 一、四三八 最も多く 二五歳 一、四〇九 二七歳 一、三五一 二四歳 一、一九一 等之に亞ぐ、妻は 二一歳 一、六八〇 最も多く 二〇歳 一、五五七 二二歳 一、五五五 二三歳 一、三三八 一九歳 一、〇七七等之に亞ぎて多し尚夫の年齢に付て見るに 二〇歳未滿にて婚婚するもの 九一 二〇歳—二四歳 三、二二〇 二五歳—二九歳 六、一〇二にして 三〇歳未滿にして婚姻するものは（七割三分）に當る、 五一歳以上にて婚姻するもの 四五八 あり

妻の年齢に付て見れば 一五歳—一九歳 二、一四六 二〇歳—二四歳 七、一六四 二五歳—二九歳 二、五八四にして 三〇歳未滿にて婚姻するものは 八割八分 にして 五一歳以上のもの 二四五 なり

離婚　昭和十二年の本籍人離婚は一、三三にして前年に比して七六の増加にして人口千に對する割合は一・〇五なり離婚の割合は全國中最も高きものとす

離婚の種類は妻が夫の籍を去るもの一、〇七九　夫が籍を去るもの二一　仝籍内のもの四三なり

夫婦關係繼續期間別に離婚を見れば一年未滿のもの一七三　一年以上三年未滿のもの二九三　三年以上五年未滿のもの一九六にして二〇年以上のもの八五あり

本縣本籍人に對するもの（昭和十二年）

	婚姻	離婚	出生	死産	死亡
總數	三、八〇三	一、一三三	四六、三三〇	一、三七	二五、九二九
一月	一、一〇四	一〇七	五、七一七	一四三	二、一二五
二月	一、〇八一	九九	四、七六五	一四三	一、九九五
三月	一、二七三	一三〇	四、七三八	一七一	二、二〇七
四月	一、〇一九	一〇七	三、五七〇	一三三	一、九六一
五月	一、〇二三	一〇三	三、二四七	一三四	一、九九八
六月	七七一	九五	三、〇八二	一三一	一、九〇三
七月	一、〇二七	八三	三、二九九	一〇七	一、九四五
八月	一、九二四	一二三	三、三四一	一三六	二、四四〇
九月	一、五一九	一二九	三、四七三	一五二	二、五七〇
十月	一、〇九五	一二三	三、九九六	一三七	二、三四八
十一月	九五九	九三	三、八二三	一〇七	二、〇九六
十二月	九二〇	七三	三、二七九	一二九	二、三〇八

第二章　神社宗教及兵事

第一節　神社及宗教

一、神社及神職　國幣大社大山祇神社は大山祇の神を祭祀す越智郡宮浦村（大三島）に在り日本總鎭守と唱へ上　皇室の御尊崇篤く下武門武將の崇敬極めて深厚なるものあり境内の森嚴莊重なる他に多くの例を見す本社所藏の寶物勘からず國寶百十四點を藏す其の内最も優秀なるものは甲冑にして各年代を逐うて系統的に保有せられたる點に於ては他に比儔を見ざる處なりと云ふ、縣社　四三　鄉社　九六　村社　七〇六　無格社　四八七　なり、神職の數は國幣社宮司禰宜各一人　主典　三人　縣社　社司　四〇人　社掌　一五人　鄉社社司　九一人　社掌　三人　村社以下　二四一人　なり（昭和十三年末）

二、寺院佛堂及住職　空海が讃岐に生れたる一事は本縣に於ける眞言宗の弘通上特種の因緣となりしものゝ如く眞言宗に係る寺數は最も多くして臨濟宗のもの之に亞ぐ時宗の寺院は縣二箇寺に過ぎずと雖も温泉郡道後の寶嚴寺は一遍上人生誕の地と稱せられ全國に於ては四百八十餘寺の多きに達すと

云ふ

昭和十三年末寺院數は一、〇八七にして住職八九九人 宗派別寺院次の如し

天臺	眞言	淨土	曹洞	黃檗	眞宗	日蓮	時宗	計
寺院 九一	三四九	七六	二五〇	一七九	一四	九四	三	一、〇八七

佛堂は地藏堂 四五 觀音堂 一八 藥師堂 一八 大師堂 八 阿彌陀堂 六 其の他 二八

三、教會講義所說教所 昭和十三年末神道に屬するもの 三八三 內天理教 三三 にして其の過半數を占め金光教 七八 黑住教 三 之に亞ぐ

佛道に屬するもの 四七 基督教に屬するもの 五四 なり

第二節 兵事

一、壯丁 昭和十三年に於ける壯丁受檢の成績を見るに受檢總數 三三九〇人にして體格等位甲種 四、九四九(四割〇分) 乙種 四、四五四人 (三割六分) 丙種 二、四〇三人 (一割九分) 丁種 四七一人 (四分) 戊種 三八人 (一厘弱) なり

	身長平均	體重平均	甲種	乙種	讀書算術を知らざる者
			受檢者百ニ付	受檢者百ニ付	受檢者百ニ付
昭和十三年	一、六〇二(未)	五二・三(肝)	四〇・二七	三五・二四	〇・三
仝 十二年	一、六〇〇	五三・〇一	三四・六八	三八・四五	〇・三
仝 十一年	一、六〇〇	五二・六二	二六・一八	三三・二	〇・二
仝 十年	一、五九四	五二・六九	二六・九七	三〇・六四	〇・四
仝 九年	一、六〇〇	五三・〇一	二五・二七	二八・七七	〇・五
仝 八年	一、五九九	五二・六二	二五・八七	三〇・四九	〇・五

二、海軍志願兵 海軍志願兵の狀況を見るに受檢人員 一、八三人にして合格者 三九五人 合格割合 三割三分に當る

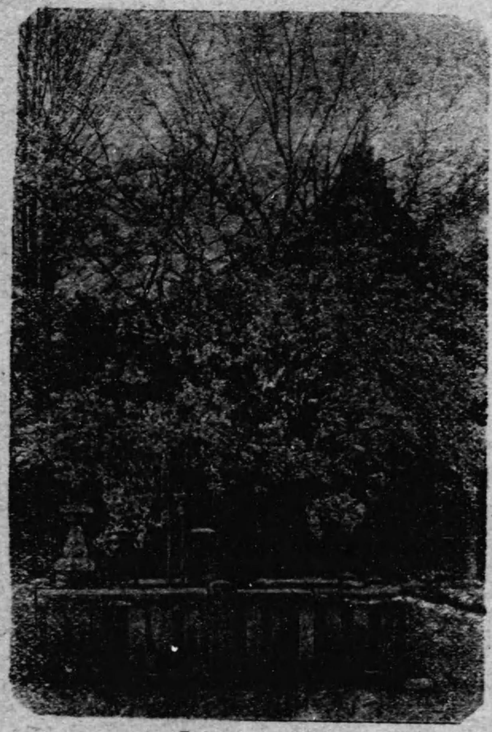
	受檢人員	合格人員	受檢者百に付合格
昭和十三年	一、一八三	三九五	三三・三九
仝 十二年	一、一六七	五三七	四六・〇三
仝 十一年	九一三	三〇一	三三・九七
仝 十年	一、〇〇〇	三一一	三一・一〇
仝 九年	一、〇七六	三三九	三〇・七七
仝 八年	一、〇一三	四〇六	三八・八七

第三章 教育

第一節 初等教育

一、學齡兒童 學齡兒童(昭和十三年三月一日)は男 一三〇、三八五人 女 一二八、七六三人にして人口千に對し 二〇三人なり就學歩合は 九九・六一 にして前年と同樣なるも昭和九年度の全國平均 九九・五八 に比するときは稍高し縣には

御下賜金を基礎とせる兒童就學奬勵金ありて之より生ずる收入及毎年度國庫より交付せらるゝ補助金に更に縣費を加へ市町村の奬學施設に對し補助し來りたるが昭和七年度より學校給食臨時施設に要する經費の補助として縣に對し交付を受けたるを以て縣は之等の金額を合し 二九、七四〇圓 を市町村に交付したり



【薄墨櫻】

二、小學校 昭和十三年三月一日現在の小學校は市町村立に係るもの尋常小學校 九三 尋常高等小學校 三三六 高等小學校 三 師範學校附屬の尋常高等小學校 二 私立に係るものは尋常高等小學校 三 にして此の外分教場 一〇五 あり

(1) 小學校兒童數（昭和十三年三月一日）は尋常科 一七九、三三〇 高等科 三五、五四七 學級數 四、八四三にして市町村立小學校の一學級平均兒童は尋常科 四五・一二 高等科 四一・四四 尋常高等兩科の兒童を合せ編成したる混成學級 四二・三三之に配置の本科正教員（市町村立小學校）は學級百に付 九一・九〇に當る小學校の出席歩合（昭和十二年度）は尋常科 九七・三三 高等科 九七・四六 尋常高等兩科の平均 九七・二七なり之を昭和九年度の全國平均（尋常高等兩科の平均）九七・〇五 に比するとき稍上位にあり

(2) 市町村立小學校教員數は本科正教員 四、三九三人 專科正教員 二八三人 准教員 一八人 代用教員 四五〇人 之が待遇に付ては深甚の意を拂ひ教員住宅供給又は住宅料支給の教員數 一、一五二人 昭和十二年度中學事研究視察を爲したる實人員 三、五七三人 之が旅費額 三四、三〇三圓 を算し平均月俸は左の如くにして尙隣縣及全國平均に比するに相當の優遇を示せり

市町村立小學校教員俸給平均一人月額（三月一日現在）

		小學校本科正教員	尋常小學校本科正教員	專科正教員	准教員	代用教員	總平均
昭和十三年	男	円 六四・五九九	円 五〇・九〇〇	円 四八・一九七	円 四七・八一八	円 三五・八七二	円 六〇・〇一七
	女	四六・二七四	四二・四三四	四四・五七五	四一・四二九	三二・〇八一	四三・〇九七

隣縣及全國との教員平均給比較（昭和十一年三月一日現在）

		全國	愛媛	高知	香川	德島
尋常科擔任	小正	円 六三・〇二	円 五七・七一	円 五三・三九	円 五二・八六	円 五八・八三
	尋正	四七・二四	四六・八九	四〇・一三	四五・八五	四三・八五

高等科擔任	小	正	六七・一六	六四・七七	五七・四二	五七・二六	六〇・八一

第二節　中等教育

一、中學校　昭和十三年三月一日現在縣立六町立一市町村學校組合立一私立一生徒は定員六、七〇〇人に對し五、六〇八人あり

昭和十二年度經費は縣立二六三、五九七圓町立二四、一〇六圓市町村學校組合立四二、五二三圓私立五二、八三三圓にして縣立に係る經常費生徒一人當五三圓餘なり、十二年度第一學年當初入學者は一、三〇〇人にして志願者百に付六三人に當る

學校數	學級數	生徒數	教員數
九	一二三	五、六〇八	二二〇

二、高等女學校　昭和十三年三月一日現在高等女學校は縣立一〇市立一私立五實科高等女學校私立一にして生徒は定員七、六四〇人に對し七、三八五人あり、昭和十二年度經費縣立三三八、三三三圓市立四五、九七四圓私立一二三、二三〇圓にして縣立に係る經常費生徒一人當六五圓餘なり、十二年度第一學年當初入學者高等女學校の本科は一、八五六人にして志願者百に付八〇人に當る

學校數	學級數	生徒數	教員數（專は專攻科、實は實科、補は補習科を示す）
高等女學校	一六	一四五	七、一二三	二五六
		（專）二	（專）一〇	
		（實）七	（實）二九二	
實科高等女學校	一	七		一五
		（補）一	（補）一四	

三、農業學校　昭和十三年三月一日現在七校何れも縣立にして生徒一、六一五人あり、昭和十二年度經費一七一、五九八圓にして經常費生徒一人當一〇六圓餘なり、昭和十二年度第一學年當初入學者は六五三人にして志願者百に付略七二人に當る而して甲種程度のもの四校學級二一生徒九四八人教員四七人乙種程度のもの二校學級一三生徒五七九人教員二六人甲乙兩種のもの一校あり學級四生徒一九一人教員一〇人なり

四、商業學校　昭和十三年三月一日現在縣立松山商業、八幡濱商業及市立宇和島商業學校の三校にして何れも甲種程度のものなり、昭和十二年度經費縣立一〇一、〇八二圓市立四一、四一七圓にして縣立に係る經常費生徒一人當六四圓弱なり、昭和十二年度第一學年當初入學者は五三六人にして志願者百に付略六八人なり

學校數	學級數	生徒數	教員數
三	四六	二、二三七	七九

五、商船學校　縣立弓削商船學校一校にして甲種程度のものなり、昭和十三年三月一日現在學級本

科八 生徒 本科 一五六人 練習科 七〇人 教員 一八人なり、昭和十二年度第一學年入學者 五八人 入學志願者百に付略 四五人の入學率を示す

六、工業學校　縣立松山工業學校一校あり從來の松山市立に係るものを昭和九年度より縣に移管したるものにして甲種程度のものなり、昭和十三年三月一日現在學級 九 生徒 二五八人 教員 一八人 昭和十二年度第一學年入學者 八八人にして入學志願者百に付 二五人に當る

七、青年學校　從前の實業補習學校と青年訓練所とを合一したる青年學校は昭和十二年三月一日現在の校數市立 二一 町村立 三四七 私立 一七 計 三八五校にして專任教員 三二一人 兼務教員 二、二九三人 指導員 九五〇人なり、昭和十二年度の經費 五三五、〇六七圓に達し近時青年教育に關する經費著しく增加せり之時勢の要求に依り青年教育の充實を示すものと謂ふを得べし

職業科別より見れば總數 三八五校中農業 二八五校にして大部分を占め農業水產 二八校 農業商業 二四校 商業 一四校 其の他 三四校とす

八、師範學校　男子師範學校 一校 女子師範學校 一校あり何れも專攻科を設置す近時入學志願者著しく增加し昭和十二年度に於ける本科第一部第一學年入學者は志望者百に付 男 二四人 女 四四人 本科第二部に在りては 男 五四人 女 四〇人にして入學志願者に對する入學者の割合は他の中等學校の增加せるに反し格段の少數を示せり

生徒數は本科 男 五〇四人 女 二六〇人 專攻科 男 二九人 女 五人にして本年度卒業者は本科 男 一四六人 女 七一人 專攻科 男 二九人 女 五人なり

九、青年學校教員養成所　青年學校教員養成所は元縣立愛媛縣實業補習學校教員養成所として松山農業學校に併置したりしを昭和十年度より名稱變更と共に單獨設置したるものにして修業年限二年にして昭和十三年三月一日現在學級 二 專任教員 四 生徒 四〇人にして昭和十二年度第一學年入學者 二〇人なり

一〇、職業學校　女子の學校として甲種乙種各一校あり、甲種は縣立宇和島高等家政女學校にして從來宇和島實科女學校を廢し昭和三年度より職業學校として開校せられたるものにして修業年限本科二年專攻科一年なり昭和十三年三月一日現在學級本科 四 專攻科 一 教員 八人なり生徒は本科 一八七 專攻科 三五人 年度內第一學年入學者は本科 九九人 專攻科 四〇人 卒業者は本科 八九人 專攻科 二五人あり本科入學志願者は 一一九人にして本科入學者は志願者百に付 八三人に當る 乙種は三島高等實科女學校にして青年學校令に依り設置したる町立三島實科女學校を改組して昭和十年度より開校し修業年限本科三年なり、昭和十三年三月一日現在學級 七 教員 九人 生徒 二三七人 年度內第一學年入學者は 八三人 卒業

者は 空二人あり入學志願者は八八人にして入學者は志願者百に付 為人に當る

第三節　高等教育

一、高等學校　官立松山高等學校は大正八年四月の開校にして昭和十三年三月一日現在の教員 三四人生徒 三五五人あり昭和十二年度の入學者は 三六人にして志願者百に付 三人に當る卒業者 二九人 卒業者累計 二、三六九人なり

二、實業專門學校　私立松山高等商業學校は大正十二年四月の開校にして昭和十三年三月一日現在の教員 三人 生徒 三一人 昭和十二年度の入學者 二三人にして入學志願者百に付 三人なり昭和十二年度の卒業者は 三六人 卒業者累計 一、二三人なり

第四節　其の他の教育

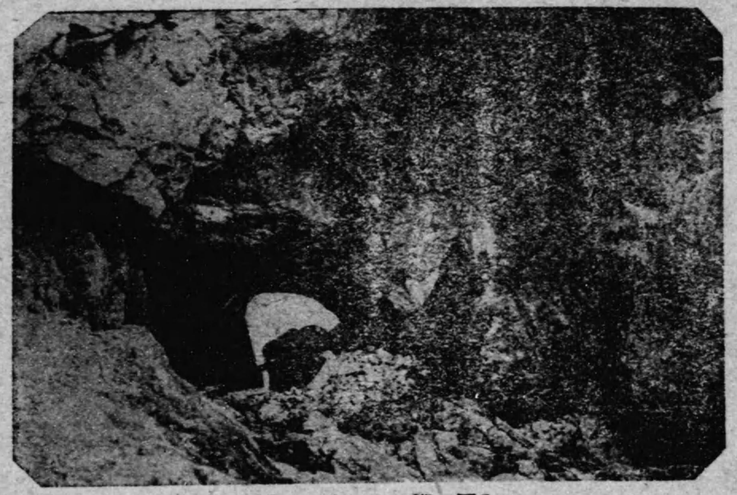
一、盲啞學校　愛媛縣教育會の設立に係る私立愛媛盲啞學校を昭和四年度より縣に移管せられたるものにして盲部聾啞部を置く昭和十三年三月一日現在教員 一八人 盲部生徒初等部 三人 中等部本科 二人 選科 四人 又別科は 一〇人なり、聾啞部生徒は初等部 六七人 中等部 二三人なり

二、各種學校　昭和十三年三月一日に於ける 校數は實業學校に類するもの 一 小學校に類するもの 七にして幼兒 男 七三五人 女 七八人 昭和十二年度の保育滿期者 男 三五〇人 女 六〇六人なり

第五節　社會教育施設

一、家庭實業學校　大正三年四月愛媛縣蠶糸業惠會の感化部を縣に移管せしものにして不良兒の感化教育を施しつゝあり昭和十二年度末の在校者 三人にして昭和十二年度の經費 九、七二圓なり

二、松山夜間中學　本校は第四節の各種學校中に包含せるも尙再記す、明治二十四年一月創立に係り勞働子弟の教育を目的とせるものにして近來勞働に從事する青年間に向學心勃興し逐年入學志願者增加の傾向を示す、昭和十二年度の經費 八、八三圓にして昭和十三年



【羅漢穴入口】

三、幼稚園　昭和十三年三月一日現在の園數は女子師範學校附屬一市及町村立 四 私立に係るもの 七にして幼兒 男 七三五人 女 七八人 昭和十二年度の保育滿期者 男 三五〇人 女 六〇六人なり

第五節　社會教育施設

一、家庭實業學校　大正三年四月愛媛縣蠶糸業惠會の感化部を縣に移管せしものにして不良兒の感化教育を施しつゝあり昭和十二年度末の在校者 三人にして昭和十二年度の經費 九、七二圓なり

二、松山夜間中學　本校は第四節の各種學校中に包含せるも尙再記す、明治二十四年一月創立に係り勞働子弟の教育を目的とせるものにして近來勞働に從事する青年間に向學心勃興し逐年入學志願者增加の傾向を示す、昭和十二年度の經費 八、八三圓にして昭和十三年

三月一日に於ける在學者 九九人あり

三、圖書館　昭和十三年三月一日現在圖書館は公立 六 私立 三 之が圖書冊數 一〇六、三〇八冊にして昭和十二年度中の閲覧延人員 四〇六、六八二人に達す

四、青年團　社會教育の對照たる青年團を見るに昭和十三年三月一日に於ける男青年團 三三八 之が正團員 四九、五三九人 女青年團は其の數 二九九 之が正團員 三〇、六三三人を有す

第四章　産業

本縣は各種産業旺にして四國四縣中遙に首位を占め關西方面に於て主要位に在り、而して大正十五年の金融恐慌、昭和五年の金輸出解禁、世界恐慌、仝六年の滿洲事變の發生、金輸出再禁止、仝七年の上海事變、仝八年の國際聯盟脱退、仝九年の未曾有の大旱風水害我が經濟上相當の大變動を現じたるも最近十箇年平均 二六四百萬圓の生産額を維持することを得たり昭和十二年は軍需工業のインフレの影響を蒙り頓に振興し、從來最高潮に達せし大正八年の 三二三百萬圓を凌駕し 三九二百萬圓の巨額に達せり

生産額

	總數	農業	林業	畜産	水産	鑛産	工産
昭和十二年	三九二、二八〇千円	七六、〇四八千円	九、二三三千円	三、九六四千円	一三、五三三千円	三四、〇九四千円	二五五、四一八千円
仝十一年	三二二、〇四〇	六六、三五七	八、七〇五	三、四七〇	一三、四三七	二四、五〇六	二〇五、五六五
仝十年	二七五、六五四	六〇、四四三	七、一五七	三、一二五	一二、五二二	一九、一九一	一七三、二一六
仝九年	二一八、九三三	四四、六九〇	六、八七四	二、七八三	一二、四〇〇	一六、四八五	一三五、七〇一
仝八年	二一二、三六七	五七、六四一	五、五五三	二、四二三	一一、五三一	一六、九七〇	一一八、二四九
仝七年	一六八、九九一	四九、七一七	四、八一五	二、二五八	九、四三六	一二、一七一	九〇、五九四
仝六年	一五一、五四四	四〇、三九一	四、六九九	二、五四三	一〇、三九四	一一、八五一	八一、六六六
仝五年	一七〇、二七八	四六、二九一	四、七〇九	二、六七五	一〇、三六三	一五、八六五	九〇、三七五
仝四年	二四八、四六八	七一、〇一四	六、六六四	三、三〇九	一三、八九五	二一、二七七	一三二、三〇九
仝三年	二五一、七八二	七一、九八二	六、四二五	三、三九九	一五、三二四	一八、七八二	一三五、八六九
仝二年	二三三、七一九	七一、七六九	六、一五二	三、一四〇	一一、七五二	一四、三一四	一二五、五九二

郡市別生産額（昭和十二年）

郡市	總額	農産	林産	畜産	水産	鑛産	工産
温泉郡	二一、〇七九、〇〇〇円	一三、六一八、〇〇〇円	八二〇、〇〇〇円	四五九、〇〇〇円	一、一九八、〇〇〇円	二五、〇〇〇円	四、九五九、〇〇〇円
越智郡	一九、二〇五、〇〇〇	九、二九九、〇〇〇	四一〇、〇〇〇	六七〇、〇〇〇	一、六三三、〇〇〇	三四八、〇〇〇	六、八四五、〇〇〇
周桑郡	一〇、四六一、〇〇〇	四、九九八、〇〇〇	二四七、〇〇〇	一八九、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	三四、〇〇〇	四、八七三、〇〇〇
新居郡	一七、三〇三、〇〇〇	四、〇二四、〇〇〇	二七六、〇〇〇	一五三、〇〇〇	五三二、〇〇〇	五六六、〇〇〇	一一、七五二、〇〇〇
宇摩郡	五五、九六六、〇〇〇	四、六二八、〇〇〇	四三〇、〇〇〇	二七八、〇〇〇	一九〇、〇〇〇	三一、四〇二、〇〇〇	一九、〇三八、〇〇〇

上浮穴郡	八、〇四八、〇〇〇	二、八〇七、〇〇〇	一、〇一〇、〇〇〇	九四四、〇〇〇	三一、〇〇〇	四、一三三、〇〇〇	
伊豫郡	一一、三四八、〇〇〇	五、五二一、〇〇〇	一七九、〇〇〇	五五一、〇〇〇	八六一、〇〇〇	三、九八四、〇〇〇	
喜多郡	一五、六三七、〇〇〇	五、四七一、〇〇〇	二五四、〇〇〇	二六〇、〇〇〇	一、一四八、〇〇〇	六、八六五、〇〇〇	
西宇和郡	三一、三六二、〇〇〇	四、三三四、〇〇〇	五二七、〇〇〇	一、〇〇七、〇〇〇	四四三、〇〇〇	二五、〇六四、〇〇〇	
東宇和郡	一〇、一〇七、〇〇〇	五、九八八、〇〇〇	七九八、〇〇〇	一、九九、〇〇〇	一三、〇〇〇	二、九七四、〇〇〇	
北宇和郡	一五、三八八、〇〇〇	八、九六八、〇〇〇	一、三三八、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	二、三二、〇〇〇	三、七九〇、〇〇〇	
南宇和郡	六、七三、〇〇〇	二、一〇二、〇〇〇	三九三、〇〇〇	九三、〇〇〇	三、六〇八、〇〇〇	四、〇〇〇	五七三、〇〇〇
松山市	一三、三五〇、〇〇〇	一、〇八七、〇〇〇	七、〇〇〇	三七、〇〇〇	一七、〇〇〇	二、九九六、〇〇〇	
今治市	五三、三五八、〇〇〇	四九五、〇〇〇	七、〇〇〇	二三三、〇〇〇	七六八、〇〇〇	五三、八五七、〇〇〇	
宇和島市	一五、七三一、〇〇〇	一、一四四、〇〇〇	五九、〇〇〇	一八七、〇〇〇	二三三、〇〇〇	一四、一二六、〇〇〇	
八幡濱市	二二、八五五、〇〇〇	九〇一、〇〇〇	二三、〇〇〇	一七二、〇〇〇	一、三九七、〇〇〇	一〇、四九二、〇〇〇	
新居濱市	七一、二四五、〇〇〇	六八三、〇〇〇	二、〇〇〇	一四九、〇〇〇	三一四、〇〇〇	七〇、〇九七、〇〇〇	
合計	三九三、二八〇、〇〇〇	七六、〇四八、〇〇〇	九、三三、〇〇〇	三、九六四、〇〇〇	一三、三三三、〇〇〇	三四、〇六四、〇〇〇	二三五、四二八、〇〇〇

主要物産（昭和十二年）

米	三三、一七八、三六六石	繭	一〇、八一七、九六五円	カマボコ、チクワ	一、八八八、七三九円		
麥	一二、〇〇九、五三〇	用材	四、四一三、六四一	イワシ	二、一五九、三五八		
サツマイモ	二、七九四、一三五	薪炭材	一、三五〇、九二七	食鹽	一、三八八、八二八		
柑橘（ミカン）	三、五二三、七九八	木炭	二、二七五、三二七	生絲	二三、三五四、七九三		
	二、五六三、三三三	煮乾イワシ	二、〇八一、九〇七	絲糸	四九、三一七、〇三一		

綿織物	五一、五二二、八一七	清酒	八、三七八、五四〇	肥料	二五、七二九、六二八		
染物	四、九二四、九三一	菓子	二、九九八、五四四	木製品	二、六四〇、九二五		
製紙	七、一四三、八二〇	鷄卵	一、六二一、〇〇六				
醬油	二、八三六、八八八	布帛製品	二、一九九、三五九				

第一節　農業

本縣の農業は土性概ね壤土地味肥沃にして農業に適し縣内普遍的に最も旺盛を極め農産物の生産額（蠶種、繭等を除く）六四、五二七、七四六圓に達す、之れを前年の數回に亙る風水害を被りたる年に比し一割四分の増加を示す、又畜産は主として副業的に廣く行はれ畜産の生産額三、九六三、八六六圓に及ぶ更に耕地の擴張改良、農産物品種の改良、農業經營改善、副業奬勵、農産物竝に副業品販賣斡旋、自作農の創設維持、農業團體の發達促進等農業施設の普及徹底を圖り技術的兩方面を有利に導くべく盡力しつゝあり

一、**農家戸數**　農家戸數は昭和十二年末一三〇、五三四戸にして前年より一、一九七戸増加し總戸數の五割六分に當り最近十箇年の趨勢に於て農家戸數は逐年減少を示したるに大正十三年頃より増加の傾向となり昭和八年來減少し昭和十一年及仝十二年に於ては稍増加せるも總戸數に對する割合は逐年減少の傾向にあり之等は總て仝國と趨勢を一にす

之を專業兼業別に觀れば專業農家九五、三九五戸（七割三分）兼業農家三五、二九五戸（三割七分）とす、最近十箇年

間は兼業農家減少の傾向を示し專業農家は增加の傾向にあり昭和元年に至り頓に增加し仝二、三年と減少せしも仝四年來增加の傾向にあり之主として兼業農家の專業となりしに由るものなるも昭和十一年末に於ては專業農家減少し兼業農家增加の現象を示したり

之を經營の主體に別てば自作 四七、四二戶（三割六分）小作 三二、二二戶（二割五分）自作兼小作 五〇、九二戶（三割九分）にして最近十箇年間の趨勢を觀るに自作農は漸減の傾向を示したるに昭和六年に增加し仝七年より減少昭和十一年より亦增加せり尙小作農は著しき減少の傾向ありたるも昭和八年來增加の傾向を示す、一方自作兼小作農は著しき增加を示したるも昭和八年來減少昭和十二年亦增加せり

更に耕作耕地の廣狹により區分すれば五段未滿の過小農 四割五分 にて大部分を占め五段以上一町未滿の小農 三割九分 一町以上二町未滿の小農 一割四分 にして二町以上經營の中農以上は僅に 二分 に過ぎず、最近十箇年間の趨勢を觀るに大體に於て二町未滿の小經營漸增し二町以上の中經營以上のもの年々減少の傾向を示す

二、農產物

(1) 米　米は昭和十三年に於て作付段別 四四、三三四町 收穫高 九三三、六六三石 價額 三一、五七四、二六八圓 反當收量 二・一〇六石 にして前年實收高に比し 一分四厘 の減少にして最近五箇年平均實收高 八八二、二六五石に比して 五分四厘 の增加を示す之本年は前年に比して病蟲害風水害比較的廣範圍に互りたるに因るものなり今治及松山附近の平野に多產するものにして大正四年より米穀檢査を實施して以來阪神地方市場に於ける伊豫米の聲價高し

	昭和十三年			收穫高			
	作付反別	收穫高	價額	昭和十二年	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年
水稻	四三、六五六町	九二七、三七九石	三一、三五五、六六〇円	九六二、九五二石	九七六、七五三石	八七八、八一八石	六四〇、一三一石	一、〇九九、五三〇石
陸稻	六六八	六、二八四	二一八、六〇八	六、〇三三	六、〇九一	五、一五六	一、七三二	七、一〇四
計	四四、三二四	九三三、六六三	三一、五七四、二六八	九六八、九八五	九八二、八四四	八八三、九七四	六四一、八六三	一、一〇六、六三四
一反步收穫高	—	二・一〇六石	—	二・一八八石	二・二一九石	一・九九二石	一・四八二石	二・四九五石

隣縣との米收穫高比較（昭和十二年）

	德島縣	香川縣	高知縣	本縣
收穫高	四六九、一二三石	八三一、七三五石	六一〇、二三二石	九六八、九八五石
一反步收穫高	一・六八三石	二・二〇一石	一・五五六石	二・一八八石

(2) 麥　昭和十三年に於ける麥作は作付反別 四一、三二六町 收穫高 六〇四、八一八石 價額 一三、二三八、八一六圓にして最近五箇年平均收穫高 六二〇、六一七石より多し稞麥は最も多く 五二五、三四二石の生產ありて一反步收穫高田 一・六七一石 畑 一・三七三石の割なり

昭和十三年

作付反別	收穫高	價額
大麥	三〇三町	四、八六九石 五八、三二三円
小麥	七、七九八	一〇六、五七四 五、二四二
裸麥	三三、二七	四九四、〇〇五 二二六、三五二
燕麥	六九	九、六八五、三五六 五二五、三四一
計	四二、三八七	六〇四、八一六 六四七、〇一三
一反歩收穫高	—	一・五六七 一・五九

收穫高

昭和十二年	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年
一〇三、三四八	一〇五、〇三七	一〇七、四四一	八六、七七九	
五二四、四九五	五八四、四八七	五四三、〇九九	三九九、八二七	
九二四	六	四	—	—
六三四、四七一	六九五、二九六	六五六、五四七	四九三、九四三	
一・五六七	一・七三七	一・六三七	一・二三三	

隣縣との麥收穫高比較（昭和十二年）

德島縣	香川縣	高知縣	本縣
四七三、八九四石	八〇六、九四三石	一四五、九四七石	六四七、〇一三石

(3) 食用農產物　昭和十三年に於て食用農產物は總作付段別一九、三七町之が產額六、四四六、九〇三圓にして前年に比して九六四、七八〇圓約一割五分增加せり食用農產物は食糧土地利用上重要なる關係を有し就中甘藷は全國第九位の產額（昭和十二年）を有し一部縣民の食糧に供せられ又澱粉を製造し阪神地方に移出するもの尠からず又玉蜀黍は北海道に亞ぎて全國第二位の產額（昭和十二年）を有し山間部に於ては食糧とし又牛馬の飼養糧に當てらる主なるもの次の如し

昭和十三年

作付反別	收穫高	價額
大豆	三、三七町	二七、三〇六石 六、六八〇円
小豆	一、一二四	六、八〇七 一、九四一
アワ	六五五	四八、七〇三
トウモロコシ	四、二八九	三二、四五四、七三五貫 三、二九五、一七七
サツマイモ	八、一六六	二八、九八一、四七七貫 二、二七九、八三九
ジヤガイモ	八、七七	二、一三三、一九五

收穫高

昭和十二年	昭和十一年	昭和十年
二五七、四〇九石	二五五、二四四石	二一、〇二三石
六、四九五	六、五二六	六、一七九
一九四、一六四	七、二六五	六、三六六
六五九、五七〇	四五、二七三	三一、三九六
三三、一九七、二七七	二八、九八一、四七七貫	二五、四四九、四二四貫
二、二七九、八三九	二、四七四、一九五	一、九二一、六三一

(4) 果實　果實は全國屈指の產額を有し昭和十二年產額五、三九六、三〇〇圓にして靑森、靜岡、和歌山の各縣に亞ぎて多產す殊に蜜柑、夏橙、日本梨等は氣候風土に適應し風味に富み美味にして一般の嗜好に適し又出荷、販賣に統制を加へし爲近年東京、阪神方面に需用增加し聲價著しく高し梨は松山附近柑橘は宇和島附近を主產地とす主なるもの次の如し

昭和十二年

數量	價格
日本梨	二、六〇四、一七一貫 五八五、八四〇円
ミカン	二二、〇七三、八八六 二、五六二、三三二
ネーブルオレンヂ	五六三、七〇三 二四八、五二九
夏橙	三、五七三、八九六 二、四三二、三六〇

昭和十一年

數量	價格
二、五〇七、四〇〇貫	五五二、一一三円
六、六三七、八九六	二、一二四、三七二
五四五、五六四	二〇六、六九三
二、四三二、三六〇	四二八、八六六

昭和十年

數量	價格
二、五六二、九〇〇貫	四七〇、六〇六円
一〇、三九二、九九六	一、八二四、九九一
四九三、一七六	一九三、四二四
三、四四八、九九九	七二七、六六九

生　柿　一、九五四、三二　四九二、九二五

(5) 蔬菜及花卉　昭和十二年に於ける蔬菜及花卉の産額は總作付面積 九、二八町 之が産額 四、七九、三五
九圓に達す主なるもの次の如し

作付反別	收穫高	價額	昭和十一年	昭和十年	昭和九年
ソラマメ	一、七二三町	一九、九二五石	三六、一六四円	二〇、四五〇石	二三、二〇二石
キウリ	二八五	一、〇九九、三八一貫	一、〇六二、八五二貫	九五七、二六五貫	八六一、七九貫
シロウリ	一三五	四六一、〇七二	七七、八二	三三三、〇四四	二九二、二三八
カボチヤ	三一八	一、二五五、五六	一四五五、四四六	一、一九一、一六八	一、一九五、一六六
スイカ	六二五	三、三〇三、七四二	五五七、九六八	九七〇、六九五	七八七、〇七六
ナス	四〇四	一、四〇〇、五二一	二四四、六八八	四、一六二、〇九〇	三、六三四、七四八
トマト	一六七	六〇三、八五六	九四八、八三三	一、三二二、三四七	九七七、〇五六
生大根	一、八七一	二〇、七七七、三三四	九四九、二四六	二、九二六、二九一	二三、二〇八、三三四
カブラ	二三三	七八五、一四一	八四四〇	八九五、二五六	八七七、六三五
ニンジン	一三六	三七七、五二六	三六七、八〇三	三六七、八八七	三四二、六八八
ゴボウ	三七七	一、一八六、二三一	一、〇二一、九二四	一、〇二一、九二四	九三二、六五五
サトイモ	一、二六九	五、〇二〇、四五〇	四、四〇五、八七三	四、四〇五、八七三	三、二四八、二五二
レンコン	七〇四	三三八、九四一	三三五、四六三	三三五、四六三	二八四、九一三
ネギ	一九五	五〇三、四〇〇	四八五、〇〇八	四八五、〇〇八	三五七、九〇三
タマネギ	三九二	二、〇五九、〇七八	一、三八〇、〇五五	一、三八〇、〇五五	二七二、一六五
ツケナ	四六六	一、七三五、三〇九	一、六六三、四五三	一、六六三、四五三	三五五、一六五

(6) 工藝農産物　米麥作を主とする本縣に於て多角經營として工藝農産物の栽培を奬勵指導せる結果昭和十二年に於て總作付面積 七、七一四町之が産額 四、三三、六五〇圓となり全國第十位にあり主なるもの次の如くにして何れも全國有數の多産地とす

作付反別	收穫高	價額	(全國ニ於ケル地位)	昭和十一年	昭和十年	昭和九年
コウゾ	六七一町	一八四、二七円	(六位)	一七七、五八一貫	一五二、八〇六貫	一五〇、〇九七貫
ミツマタ	二、九八六	一、二〇九、〇二四	(二位)	九七三、八四一	七六〇、五九〇	八一〇、二六〇
ジョチユウギク	一、三八五	九五六、一二四	(三位)	三三五、六九六	四三二、六八二	二七四、七五七
ハゼ	一、〇四六	三四七、七三一	(二位)	七二八、三九一	八一四、三三六	六二八、四三三
葉煙草	六八四	一、一九八、六八〇		三二六、九四三	三二一、一九	三六七、三四〇
ナタネ	五八二	一七三、〇七四		六、八八三		六、三九

三、畜産物

(1) 家畜及家禽　元來本縣は氣候温暖なるに依り家畜家禽の飼育に適し家畜としては牛、馬、豚を主とし家禽は鷄を主とし鴛之に亞ぐ牛は早熟早肥の性を有し柔順なるに依り農耕、運搬等の力役に適し又肉質優良なるを以て東京、阪神地方に多數移出し食用に歡迎せらる南豫地方は畜牛に適し就中御荘

牛及三崎牛は夙に良牛を産し且宇和島を中心とする全地方には農村娯樂として鬪牛盛んに行はれ地方名物の一として有名なり、馬は一時畜馬旺なりしも明治二十四、五年頃より漸減したり之一般に馬は主として農業用運搬用に使用せられたるものにして養蠶の旺盛と交通機關の整備變遷によるものなるべし我國現下の產業經濟界未曾有の難局は農業經營の集約となり自給肥料の使用となり豚、鷄等を副業的に飼育し玆に家畜家禽の飼育旺になれり

	和十二年			昭和十一年		昭和十年	
	飼養月數	成禽羽數	雛計數	產卵量	價額	羽數	產卵數
鷄	五四、五九七	四九三、五二四	三〇二、三四四	七九五、八六八	六三、四八二、五〇四 個	一、六二、〇〇六 円	七六八、三七七
鴨	二一〇	一、八七六	一、八七七	三、七三五	一五二、七二四	三、六六七	四、八一三

	昭和十年	
	羽數	產卵數
	七八八、四四六	五五、三七七、一二八 個
	三四八、一九〇	七、三三〇

四、副業

關西第一の小產業國たる本縣の農村をして益々勃興內容充實を促すべく三十二種の指定副業を定め山地部には三極、楮、茶、椎茸等の栽培加工平坦部に在りては藁工品、眞綿及眞綿加工品、絹織物等の製造加工を圖りつゝあり之が助成の爲奬勵金を交付し副業組合を處々に設置せしめ共同經營により生產、販賣施設をなさしめ之に依り疲弊せる焦眉の農家經濟の一端を緩和し其の效果一般に知られ既に副業組合は二百有餘を算す而して縣下の之等組合統一連絡を圖り見本市、展示即賣、市況調查、販賣斡旋等を爲す爲全國に卒先して副業協會を設立し範を示す副業的生產額は凡そ昭和十二年に於て一、三七萬圓に達す

第二節　蠶絲業

蠶絲業は本縣の主要產業に屬し昭和十二年に於て三、三四〇、九二九圓の產額あり養蠶は主として副業として近來縣下各地に普及せられ東中豫地方は中、小規模經營多く南宇和郡を除いては大經營者相當ありて殊に旺なり常に之が助長に盡力し町村を單位とせる養蠶組合により共同經營を奬勵し又蠶品種の整理或は桑園の改良蠶兒飼育の向上刷新等逐年生產の改良增殖の實を收め來れるが共同繭倉庫及共同乾繭裝置の設置を奬勵して斯業經營組織の根本的改善策たる乾繭取引の普及を計り又松山に繭檢定所を設置し以て繭取引の公正圓滑を計り且つ製絲講習所を設置し製絲に關する學理技術を敎授し傍ら製絲敎婦の養成をなすと共に製絲に關する試驗研究を行ひ製絲業の改良發達に努めつゝあり

一、桑　畑　昭和十三年（六月末）に於ける桑畑段別　九、五六町にして前年に比し　九三町を減じたり桑の仕立方に依り區別すれば根刈　九、四七町　中刈　一六町　高刈　一〇町　立通　三町にして之を栽培地別に

【三津ノ朝市】

觀れば本畑 九、一〇三町 其の他の畑 三〇三町 其の他 一三〇町なり

二、養蠶戸數　昭和十三年に於ける養蠶實戸數の總數は三六、六〇五戸にして中春蠶 三五、四〇四戸 夏秋蠶 三四、三六戸（内春蠶を飼育したるもの三、二三五戸）なり而して最近の趨勢を觀るに急速なる增加の傾向なりしも昭和五年より減少の傾向となれり前年に比し 芬 の減少とす

三、蠶種掃立數量　昭和十三年に於ける蠶種掃立數量 二、七〇〇、九八六グラム 中白繭種 二、六〇七、三四六グラム 黄繭種 九三、六四〇グラム 又季節に依り觀れば春蠶 一、三五八、〇七五グラム 夏秋蠶 一、四四二、九二一グラム の掃立あり最近十箇年の趨勢を觀るに急速に增加したるも昭和五年より物價下落の爲飼育數減少の傾向となれり

四、繭　繭は關西第一の產地にして品質優良とし

て其の名高し 昭和十三年繭產額は 九、八〇四、八八六瓩 にして春蠶 四、八五九、七三一瓩 夏秋蠶 四、八〇六、三三九瓩 なり之を白繭、黄繭種に區別すれば白繭種 一、七三二、五一五貫（八割四分）黄繭種 八二、三七一貫（一割六分）にして又上繭 一、六二八、七四六貫（九割一分）玉繭 一〇三、二四貫（五分）屑繭 八四、〇二六貫（四分）の成績を示す

最近十箇年間の趨勢を觀るに著しき增加の傾向にありたるも昭和六年來減少の傾向を示し亦昭和十二年に增加せしも本年に於ては前年に比し 三九五、〇八四貫を減少せり

五、蠶絲　昭和十三年に於ける製絲場數 一二六 繰絲釜數 四、〇八三 職工數 四、九五〇人 生產額は生絲 一〇、九五一、二四七瓩 屑物 七二、六〇〇瓩 にして總價額 二、三六二、〇五九圓 前年に比し 一、〇二五、七三四圓の減少とす 其の品質に於ては本邦第一を以て目せられ所謂伊豫絲の稱あり南豫地方に多產す

第三節　林業

本縣の昭和十一年末林野面積は 三七、三六町にして中公有林 五、一五三町 社寺有林 三、四三町 私有林 三一、九〇八町 國有林 四二、九五三町 なり、亦之を林況別より觀れば針葉樹林（四割）濶葉樹林（三割一分）針濶混淆樹林（三割九分）竹林（一分）無立木地（九分）を示す、從來の施設は公益的林業の助長に努めたるも近時一般民有林の造林促進の方面にも努め官行造林の促進模範林の造成、水源涵養林補助、林道改修に對す

る補助等相當見る可きものあり、林業は造林竝に林道完成の曉には縣產業の重要地位を占むるに至るべきなり

一、林產物　昭和十二年に於ける林產物八、九九一、四八五圓にして公私有林の年伐採量は用材、薪炭材を合して五百万圓內外に達す、近時財界の影響を受け伐採量增加の趨勢に在りて過伐の嫌ひあり殊に伐採齡の漸次低下しつゝあるは最も考慮を拂ふべき現象なり、山林の樹種は主として杉、扁柏、松、クヌギ等とす

主なる產物は用材二、九一七、八五四石四、四一三、六四一円　薪炭材六四七、一八五棚一、二五〇、九二七円　竹材一六八、七五二束六二、八三八円　クリ一四、二九一石三一四、三九一円　椎茸七二、七六二斤九七、五六五円　タケノコ八〇四、七九七貫一四二、七一五円　マツタケ五五九、三五八斤一三七、〇八〇円　木炭一〇、三八二、八七九貫二、一七五、三一七円　等なり

第四節　水產業

本縣は三方海に面し海岸の出入に富み海岸線の延長は三百十里にして全國第五位にあり三崎半島は外海と內海とを劃し魚族の分布、漁業の狀態自ら異り隨て漁業の種類も多樣なり、概して外海は魚族豐富なるも內海は漸次集約に向ひつゝあり古來鰮、鯛、鰹、鰺等を主なるものとす、東部一帶は淺海にして魚介漢類の養殖に適す、昭和十二年に於ける水產物價額は一三、六五七、五二四圓に達す

一、水產業者　昭和十二年末現在縣下の水產業者四三、六六八人男三六、四九六人女七、一七二人にして內業主は四割被用者は六割なり又本業者二〇、五二四人副業者二三、一四四人にして從業別に觀れば漁撈は七割五分養殖は二分製造は二割三分の割合なり

二、漁船　昭和十二年末漁船數一六、九六三隻にして北海道、長崎、千葉、山口縣に亞ぎて多數あり內動力を有するもの二、三三七隻動力を有せざるもの一四、六三六隻にして動力を有せざる漁船は漸減し動力を有する漁船は漸增の趨勢に在り

三、沿岸漁獲物　昭和十二年に於ける沿岸漁獲物價額六、三四五、九六一圓にして全國中第七位なり、魚類の主なるものは鰮一〇、〇八三、〇二二貫二、一五九、三九八円　タヒ二八三、〇九二貫一、〇〇二、九一九円　アヂ一二〇、四九四貫一三〇、三五六円　サハラ一二二、五三〇貫三〇四、六五〇円　ボラ八五、五六五貫一一〇、九七四円　カレイ、ヒラメ六三、九六九貫一二七、九三七円　エビ二七七、七四八貫二〇〇、〇七四円　タコ二二八、九三七貫一八三、六六四円　イカ一八七、六九四貫一五四、七二九円　等なり鯛及鰮は長崎縣に亞ぎて全國中第二位なり

四、遠洋漁業　昭和十二年に於て內地沖合遠洋漁船は七〇隻（一、六四三噸）にして乘組員九七〇人漁獲高八六二、九七〇貫三二四、五二一円漁船を漁業の種類により區別すれば旋網漁業九隻沖曳網漁業四隻一本釣漁業二六隻鰹釣漁業一六隻其の他一五隻とす、之等漁獲高中主なるものはカツヲ二七九、五〇〇貫一七〇、四九六円　サバ三九一、六五〇貫五三、二八〇円　等なり、又樺太、朝鮮、臺灣等の沿海に出漁せるもの船數七六隻（一、四六二噸）乘組人員九〇一人漁獲高六五七、四五〇貫四六五、五八一円に達す主な漁獲種類は鰮、鯖等なり

五、水産養殖　昭和十二年に於ける水産養殖場數 九〇七 面積 二、七八八、九九九坪にして收獲高 八〇、九八六圓養殖の主なるものは鯉、鰡、眞珠、アマノリ等にして年々旺になりつゝあり

六、水産製造物　昭和十二年の産額 五、二五七、五〇一圓にして全國屈指の生産なり、其の主なるものは鰹節 二七、三一一貫 二六、八六〇円 塩乾イワシ 四三二、七五四貫 六九三、五四三円 煮乾イワシ 二、〇四〇、九八二貫 二、〇八一、九〇七円 カマボコ、チクハ 一、二四四、九七二貫 一、八八八、七三九円 等にして就中宇和島蒲鉾は其の名高し

七、製鹽　食塩は本縣中越智郡、新居郡地方に産するものにして昭和十二年に於て製造人員 八一人 從業者 一、九九五人 塩田段別 二九八町 之が收納 三一、四七三、六九〇円 一、二三八、八二八円 なり

第五節　鑛業

一、鑛區　鑛山の最も著名なるものは住友別子鑛山株式會社の經營に係る別子銅山にして其の他大小の鑛山點在す、鑛區の大なるものは住友、三菱、日本産業、矢野、岩城等の經營にして金、銀、銅、銅硫化鐵鑛、硫化鐵鑛を主産とす

二、鑛産物　本縣の鑛産の主なるものは金、銀、銅、銅硫化鐵鑛、硫酸等にして銅は秋田、栃木に亞ぎて産額多し鑛物は概ね縣内にて製錬せられ製錬所に住友經營の四坂島製錬所、新居濱電氣分銅所等あり

第六節　工業

工業は本縣の主要産業にして海運の發達原料品及勞力の供給潤澤豊富なる發電水力の利用等有利なる條件の備はれると相俟ち昭和十二年に於て總生産額の凡 六割三分 を占め 二四三、〇六三、二〇〇圓（蠶絲類を除く）の産額あり

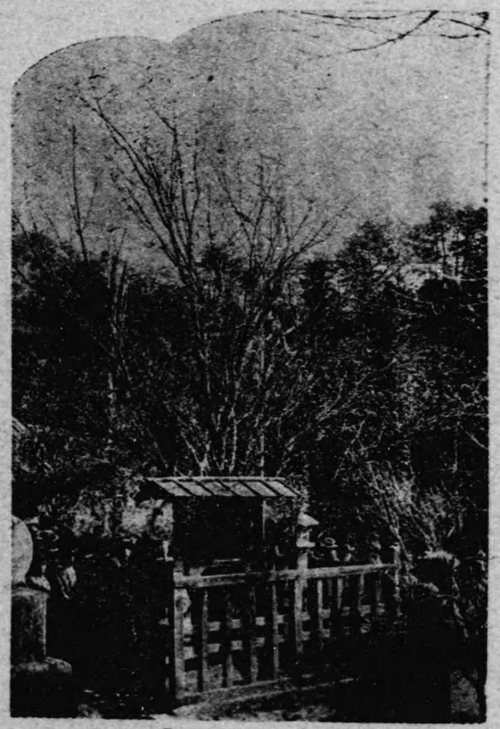
一、工場　昭和十二年に於ける常時職工 五人以上を使用する工場數 一、三一七にして業態別により其の狀況を見れば次の如し

		紡織	機械器具	化學	食料品	金屬	窯業	製材及木製品	印刷製本	瓦斯電氣	其他	計
工場數	無動力	二四	一一	七	八四	—	二六	七	一	三	一八	一八一
	有動力	三三一	一〇二	一一五	三三四	二五	一一	一一九	二九	二九	四一	一、一三六
職工數	男	三、八八〇	三、三五七	六、〇六二	二、八〇七	四五九	四六八	一、一六五	三八八	二九一	四二一	一九、二九八
	女	二〇、五三一	三一	二、五三七	一、一九〇	七	一〇六	一二〇	二二	—	五九六	二五、一四〇
生産價格		一二三、一五八 千円	九、七一〇	八二、六一二	一一、八四三	三、〇三〇	五九一	三、一六八	八四八	八、六八七	二、二七八	二三五、九二五

二、工産物

(1) 織物　纖維工業殊に旺にして昭和十二年に於て綿織物産額 五一、五一二、八一七圓にして全國第五位なり、内廣幅物は 三八、六八六、八五九圓を示し中綾綿布 七一、五六六、二七二円 一三、六七五、七一一円 にして大阪、愛知に亞ぎて多産し粗

布 二一、三二〇、八五〇磅 四四、六〇九、八三六磅 一四七、四九四、九五二磅 一〇、三九七、〇九三円 綿ネル 一四七、四九四、九五二磅 一〇、三九七、〇九三円 綿木綿及織色無地 四四、六〇九、八三六磅 一四七、六三一、一七九円 等主なるものにして綿ネルは大阪に亞ぎて多産す之等は凡て何れも今治を中心として製織し中華民國、南洋方面、アフリカ、印度及北米の一部に輸出せらる、又小幅物 三、七五〇、七〇五圓主なるものは白木綿 一、三九六、一四〇磅 一七三、七四〇円 絣木綿 二、一五〇、一三五磅 九八、〇六一、七三〇円 等なり特殊物 九、〇七五、三五圓主なるものは タオル 五、六四五、九三三打 四、九三二、三六〇円 【櫻十六日】にしてタオル地を含めて全國第一に多産す、絣木綿は伊豫絣と稱し全國第一に多産し價格低廉を以て全國に知られ概ね松山附近に製織せらる



せらる

近時織物業界は人絹交織の異常なる進出に依り一大轉換期に當面し之に對する設備準備對策として●●●

中飲食用器物 三云、三六〇圓 家具及裝飾品 毛、三〇〇圓等主なるものにして主産地は櫻井町にして中國、九州の各地に移出さる

陶磁器は昭和十二年に於て製造場數 元 職工數 三四七人 窯數 七六にして産額 五四九、七七圓（海外向輸出向 二四〇、八七〇〇円）あり大部分伊豫郡に産し砥部燒最も名高く內地各地及海外に多く移出さる製品の主なるものは茶碗及コーヒー碗 七六、〇〇〇圓にして其の他花瓶、置物、裝飾用品、皿類、鉢類等とす又樂燒として二六燒（宇摩郡松柏村）水月燒（松山市及道後湯之町）江山燒、五色燒（郡中）等あり

此の外瓦の産額 八四四、五六三圓ありて越智郡菊間地方に最も多く産し菊間瓦の名高し

竹製品は昭和十二年に於て製造場數 七九 職工 一、三〇二人 産額 三四一、五六圓にして松山市、西宇和郡に多産し主として籠及笊等なり

(8) 木 蠟 昭和十二年に於て製造戸數 一四 職工數 五六人 生蠟 二七〇、八一二貫（二七三、四四九円）晒蠟 二四、六三〇貫（九一、二六二〇円）の産額あり、製品は阪神地方の商賈の手を經て海外に輸出さる

三、電氣事業 電氣事業は近年製產工業の發展に伴ひ甚だ旺盛に向へり、昭和十三年に於ける會社數 九 總資本 四七、二七五圓にして總發電力 九八、五〇〇キロワット に達す、而して光力の供給を見ざるは島嶼、山間等の極めて僻阪の一部のみにして常時燈取付燈數 五六〇、七三〇燈にして一戶當 三燈三元 の割なり、大口電力契約 四六、一〇〇キロワット 小口電力契約 一五、七〇〇キロワット、電熱用其の他電氣裝置 三五、三〇〇キロワットに及べり

第七節 會社及金融

一、會社 昭和十二年末本縣に本店を有する會社數は 八四五之が資本金 一三、六七〇、八四三圓にして組織別より之を觀れば株式會社（社數 資本一二円、二一八、五〇〇円）二九〇 社數の 三割四分 資本金の 九割四分 を占め 合資會社（社數 資本五、〇四五、〇二二円）四三二 社數の 五割二分 に當り社數に於ては 合資會社最も多し合名會社（社數 資本二九、五二四千円）四〇五 なり、會社を事業の目的により觀れば商業（社數 資本二、二〇七千円）三五 鑛業（社數 資本一、六六千円）五 水產業（社數 資本五二千円）四 なり

二、金 融 昭和十二年末に於て銀行（本縣に本店あるもの）八 無盡業 五 信用組合 二八 質屋 三六 內一般のもの一七五 公營もの 五 郵便局所 三五あり尙昭和七年十二月より松山に日本銀行支店の設置ありたり

(1) 銀 行 昭和十二年末に於ける銀行本店 八 支店 八九 資本金 一四、五三六千圓 拂込資本金 一〇、八三千圓にして貯蓄銀行一行あり昭和十二年中預高 四〇三、九三四千圓 年末現在 一〇五、〇二五千圓 又貸付高 一七六、五三千圓 年末現在 五二、〇五三千圓なり

普通銀行の割引手形は割引高 五八、八三千圓にして內 商業手形（割引高 三六、〇三八千円 年末現在 二四、二〇千円）

荷付爲替手形 本年割引高二万、〇四四千円 年末現在高 二八二千円 普通銀行の送金爲替は振出高 一〇七、八六千圓 受込高 八四、三六三千圓 又代金取立は振出高 五八、四〇三千圓 受込高 八四、三六三千圓なり

(2) 産業組合 昭和十二年度末に於ける産業組合數 三四にして内事實信用事業を行ふもの 二八あり年度末資金調査組合數 三〇五の拂込出資金 四、七三四千圓 積立金 三、四二七千圓 借入金 四、八六千圓 貯金 三、九八九千圓 損失金 三、四八三千圓 剰餘金 三、五二〇千圓 差引計 二七千圓にして一組合平均 八五圓なり

組合員數 一六八、三九八人にして業態別に之を見れば農業最も多く 四一、三三四人 商業 一四、五三八人 工業 五、〇九三人 水産業 四、四三二人 林業 五四人 其の他 一四、七一八人なり

年末現在貸付金 三、五三三千圓 手形割引 七千圓にして貯金は年末高 三、九九千圓とす

(3) 無盡業に關する會社は 五 にして松山、宇和島、新居濱、新居郡西條町に各一あり

昭和十三年末組數 一、六七 總口數 四八、三四〇にして百圓迄 (口數一) 三百圓迄 (口數三、三六六) 五百圓迄 (口數三八、七〇八) 千圓迄 (口數六、七三) 三千圓迄 (口數六九四) なり又期間別に之を見れば三年迄 二、六三五 口數五年迄 四五、〇二一 口數十年迄 六九四 口數とす

(4) 質 屋 昭和十三年末に於て店數 三六 内一般のもの 一七五 公營質屋 五一 之れが一箇年中の貸出高 口數 二、三八五、一四六 金額 一、五三三、二九七円 一口當平均四圓三錢なり、一箇年間受戻高 口數 二三〇、四六二 金額九九七、一三九円 流質高 口數 一九、六九七 金額五九、一七六円 にして貸出高に對する流質の割合は 二分六厘 とす

(5) 郵便貯金 昭和十二年度中に於ける預入高 三二、四七四、九二二圓 拂戻高 一九、〇三七、七五四圓 にして年度末現在 三七、二八三、五七〇圓之が人員 六〇一、八八八 一人當平均 六二圓九四錢なり

第八節 産業諸團體

昭和十二年末に於ける産業諸團體は水産關係 一六七 (漁業組合 一四五 同聯合會 九 水産會 一三) 養蠶業組合 二四 養蠶實行組合 五六八 同聯合會 一 其の他養蠶關係 三 畜産關係 三 同聯合會 一 農事實行組合 三〇九 茶業組合 一 農會 一七 同業組合 一七 (果物 四 養蠶 二 除蟲菊 一 紙 一 漆器 一 材木 二 肥料 一 油揚 一 織物 四 同聯合會 一) 等あり、尚産業組合數は 三四 同聯合會 五 にして各其の目的に向つて活動しつゝあり

第五章 交通及通信

一、道路及諸車

昭和十二年末國道一線延長 九八粁 縣道延長 二、七二八粁 市道 四〇三粁 町村道 九、九二粁なり、鐵道軌道の敷設未だ乏しく概要地點の連絡は自動車の定期往來比較的旺なり

昭和十二年末に於ける諸車數次の如し

乘用＝馬車　五　自轉車　一二三、五〇六　自動自轉車　九六　人力車　三二七

荷積用＝馬車　一、七〇四　牛車　八二五　荷車　三一、九一一　其他　一一、四五五

二、鐵道　國有鐵道の敷設は未だ縣内の一部に過ぎず豫讃線の縣内走行は二三一・六粁宇和島線二五・六粁にして宇和島線は昭和八年十月より國有鐵道に移管されたるものとす

昭和十一年度縣内各驛の乘客（乘車人員 六、四三四、六六二人　降車人員 六、三五六、〇八七人）乘客賃金　二、〇一三、七六九圓　小手荷物（發送到着 四七七、四一九個　八〇二、二五六個）

貨物（發送到着 一二一、〇一四瓲　一〇五、二〇二瓲）運賃は小手荷物　一二三、六九六圓　貨物　五五三、二九四圓なり

私設伊豫鐵道は我國に於ける輕便鐵道の嚆矢にして明治二十一年の開通なり、松山市を中心として郡中線（松山郡中間）森松線（松山森松間）横河原線（松山横河原間）あり又松山道後及松山高濱間は電車に依る

伊豫鐵電に係る乘客賃金次の如し

	乘客	發送貨物	乘客賃金	貨物賃金
鐵道	五、九九一、〇二六人	八三、七四六瓲	四六八、八二三圓	六六、三六三圓
軌道	四、一五六、八二一人	—	一六〇、八三七圓	—

尙新居濱端出場間に住友經營の輕便鐵道　一〇、三粁あり其の業績次の如し

	乘客	發送貨物	乘客賃金	貨物賃金
	九九三、五四六人	九五八、九一九瓲	三七、七八二圓	二九七、三八三圓

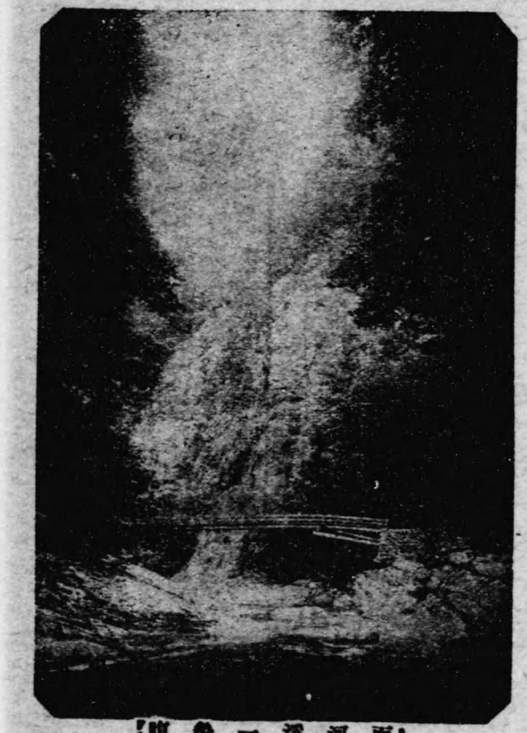
三、海運　海岸線の延長　三一〇里岬灣の出入に富み天然の良港多く古來沿岸航路能く開け阪神、中國、九州地方に毎日數回の定期航路あり我國海運史上夙に其の名顯著なるものあり殊に今治港は開港場として最も殷賑を極め新居濱、高濱、三津濱、長濱、八幡濱、宇和島等の各港亦旺なり

主要港灣移出入貨物、入港船舶竝乘降船客

	移出入貨物						入港船舶		乘降船客	
	移出			移入			船數	純噸數	乘込	上陸
	數量	價額	數量	價額	船數	純噸數				
今治	二九七、二六六噸	三四、七六五、〇三四円	五五三、〇〇二噸	六八、七六〇、四四八円	三三、三二四隻	二、四〇四、二六三噸	三七二、〇〇二人	三九七、四三五人
宇和島	五一五、五一〇	五五、二二九、八六五	四二九、一四四	五三、六五八、五一二	四五、一五〇	一、三八二、二〇〇	七二六、九〇九	七一七、八〇〇
八幡濱	一〇七、二六八	四二、九五三、〇三六	三九〇、三五六	三六、七一七、六二九	五四、四〇一	二、〇一一、六四五	二六三、三五二	三一七、五〇〇
三津濱	五四二、二四九	四一、二八三、六〇八	五七八、七二九	四三、一三二、六七六	七九、五六九	四、八九六、二六八	九九、二八一	九五、三五六
高濱	八三、一八二	一〇、八九九、七二九	一六四、六九三	一四、一七〇、九三二	一八、〇〇五	四、二三一、一六七	一四九、六七六	一四八、三八〇
川之江	一二一、三三四	一三、〇一四、五六一	一一二、八四〇	一一、五五三、六八三	七、一二九	九一三、六〇〇	七、二六六	六、九五二
新居濱	一、〇八一、二一六	九七、三七六、五七〇	一、二〇五、五五三	五四、四四九、二八八	一七、四七八	一、六一六、七一九	二四、四六八	二四、七〇五
長濱	一、一九九、五五六	一五、六七〇、四五四	一〇四、六三一	一四、五二八、七七〇	二〇、二三二	二、一六九、三六〇	六一、〇五八	七三、九九五
三島	四四〇、四二一	二五、四七二、六三〇	九七、八三六	三三、一二八、二二九	一〇、四一五	一、五六八、六〇一	九、九二一	九、九三一
川之石	六〇、五二八	一〇、三二〇、四八五	三九、四〇八	八、四二九、二七〇	二七、八〇〇	一、一三三、四九九	七七、八八〇	七七、六六五

四、通信　昭和十三年三月末現在郵便局所 二三五 電信取扱局所 一八九 公衆電話 二五 電話加入者 九、七四七にして通信機關は概して普及せり尚昭和三年度より縣費を以て補助を爲し町村役場に電話架設を奬勵したる關係上現在電話未設の町村は 二五九 中 三四村なり

第六章　社會事業



【面河溪一龜腹】

本縣に於ては社會事業に付慈惠救濟及特種兒童の保護教育等に關し夙に施設せし所ありしが世界大戰以來思想上社會上の激變を來し社會問題に對し一般の注意を惹くに至りしに依り民力涵養、地方改善、社會教育方面等に力を盡せり而して大正十年四月始めて縣に社會課を設け亞で仝十一年三月愛媛縣社會事業協會又仝十二年七月愛媛縣善鄰會なる事業團體生じ事務所を縣社會課内に置き玆に漸く施設機關整ひ斯事業に一新機軸を開くに至り救濟事業、福利事業、教化事業、兒童保護事業等の社會的施設年と共に進展しつゝあり

一、愛媛縣社會事業協會　各種社會事業の發達を期し縣下に於ける社會事業團體の連絡を圖る機關にして社會事業研究會、講習會、講演會、兒童健康相談所、乳兒審査會等の開設、機關雜誌の發行並視察旅行を行ひ社會事業從業員の養成を計りつゝあり

二、愛媛縣善鄰會　社會民衆をして各其の志を遂げしめ國内諸方面に渉り克く協調偕和の實を擧げしむることは現代世相に於て最も緊切なる事たるべし依つて社會の弊習たる因襲偏見を芟除し融和善鄰の促進を圖るため創設せるものにして本會は相互善鄰の趣旨を宣傳し因襲的偏見の除去に努め矯風教化振興を圖り日常生活の改善を促し其の他必要と認めたる事項を實行し又縣下に於ける該事業統一聯絡機關なり之が經費は國、縣等の補助金其の他寄附金等に據るものとす

三、愛媛縣教化聯盟　昭和三年五月中央教化團體聯合會長山川氏等を招聘し縣下教化團體關係者の座談會を開きしに端を發し凡ての教化團體並教化事業關係者の聯絡提携を圖り斯業の改善發達に資する目的にて本縣教化團體聯合會の設立當時には全國十數府縣に過ぎざりき爾來教化網の普及に努め昭

和五年八月更に規約を制定して愛媛縣敎化聯盟と稱し一層之が目的の充實を期せり而して之が下に郡市敎化聯盟を設け郡敎化聯盟には町村を單位とする町村敎化聯盟を屬せしめ其の組織に至りては全國の範たるものあり

四、縣方面委員　大正十二年十一月方面委員制度を創設し松山、今治、宇和島の三市に實施したり昭和二年以來縣下一圓に普及を圖りたる爲昭和十二年三月に於ては四市の外十五箇町村に實施し委員數八三〇名あり方面委員は擔當區域に於て一般社會狀態を調査し其の改善向上に努め保護又は指導を要する者及塊に公私の救助を受くる者につき其の實狀を視察し適切なる方法を盡し社會施設の適否を調査し其の完備改善を期し且各種社會事業團體との聯絡を保ち其の目的の達成に助力する等熱誠以て活動しつゝあり

五、救　濟　昭和十二年度に於ける救護法に依る救護人員は實人員二、九五人にして救護に要したる金額八三、一五三圓なり、救護の種類を見れば生活扶助二、四九三人　醫療五一三人　助產四人　生業扶助八人とす又行旅病人及行旅死亡人取扱法に依る救護人員は行旅病人四九人　行旅死亡人三五人にして之に要したる縣費一、八三六圓なり

六、職業紹介　大正十一年一月愛國婦人會愛媛縣支部婦人職業紹介所の開設あり續いて今年松山市、宇和島市、今治市、三津濱町、八幡濱市の五箇所其の後大洲町、川之石町、長濱町、宇和町、三島町、西條町、新居濱市に各一箇所の開設を見現在に於ては其の數一四に及ぶ而して昭和十二年中に於ける取扱狀況左記の如し

求人	男女 一七、二四七人 一四、五〇九人	求職	男女 一五、七〇五人 六、二八二人	就職	男女 八、五四四人 四、〇七五人
貸付高	口數 一五二、八六一	金額 八二二、〇二一円	受戻高	口數 一〇〇、九八三	金額 五二八、六九五円
流質高	口數 一、二四〇	金額 四、九六四円			

七、公益質屋　大正十二年一月長濱町營質庫の開業あり其の後昭和二年公營質屋法の公布ありてより漸次各所に開設するに至り昭和十三年末に於ては五一箇所にして庶民階級の金融機關として活動し其の成績良好なり

昭和十二年に於ける貸付狀況次の如し

八、住宅組合　住宅組合法に依り大正十一年より設立許可されたるもの昭和十一年末に於ける組合數四五　組合員數三七三人　低利資金貸付額五九〇、八九七圓　平均一戶當該資金融通額一、五八圓なり

九、公營住宅　昭和十一年末公營住宅戶數五二戶あり即ち松山市一四九戶　宇和島市七戶　今治市四戶　三津濱町三戶　三島町三戶　西條町一五戶　郡中町三戶　大洲町七五戶　長濱町一二戶　八幡濱市三〇戶

川之石町 二〇戸 吉田町 九戸 波止濱町 二五戸とす

一〇、釋放人保護 財團法人愛媛保護會（明治二十八年七月創立）を中心として縣下 三箇所の保護教團あり愛媛保護會は縣下免囚保護團體の連絡統一を圖り且直接間接免囚者の保護をなす

昭和十二年度中に保護したるもの直接保護 三三人 間接保護 一、一八一人にして保護を解きたるもの 五六〇人とす

一一、託兒所 昭和十二年三月末常設託兒所は 三箇所（宇和島市、今治市、大洲町、八幡濱市、波止濱町、川之石町、蔣淵村、新居濱市、長濱町、宮内村、松山市、御莊町、郡中村）にして託兒數一、一九五人なり、農繁臨時託兒所の事業は成績良好にして全國的に其の名高く昭和十二年三月末に於ける開設市町村數 二六三 受託兒童數 二〇、二九八人なり

第七章 財政

昭和十三年度地方費の狀況を掲ぐれば次の如し

	道府縣 歳出	道府縣 道府縣税	道府縣 税一人當	市 歳出	市 市税	市 税一人當	町村 歳出	町村 町村税	町村 税一人當	水利組合 歳出	水利組合 税收入
愛媛縣	九、〇五九千円	四、二七八千円	三・九三円	四、二八五千円	一、六六六千円	六・二六円	一三、三八四千円	五、六五五千円	四・八四円	一六三千円	一二〇千円
全國	五九九、四四四	二七九、八六八	三・九八	七二五、七五四	一八三、七六一	七・七八	五三三、八六〇	二二三、九三七	四・八〇	一九、八〇八	一〇、五三四

即ち本縣の地方費總額 二六、七二九千圓にして税收入 一一、六九九千圓 一人當 一〇圓〇四四に當る

本縣の地方債昭和十三年三月末現在總額 二九、四九〇、〇三八圓（轉貸を除く）にして人口一人當 二五、三一六に當る

團體別に觀れば縣債 一〇、〇五一千圓 市債 七、六七六千圓 町村債 一一、六七五千圓 水利組合債 八六千圓なり又目的別より之を觀れば教育費 二、九二五千圓 土木費 一五、一〇八千圓 社會事業費 四、二七七千圓 衛生費 一、六〇六千圓 勸業費 二、六五八千圓 其の他 二、九一六千圓なり

一、國税 昭和十二年度國税收入濟額は總額 九、二八六千圓にして内直接税 三、七四六千圓 間接税 五、五四〇千圓なり直接税中地租 二割二分 所得税 七割九分 營業收益税 一割八分 を占む

税別金額次の如し

地租	所得税	營業收益税	資本利子税	鑛業税	相續税
八二〇、三四三円	二、九八四、二八四円	六九四、三八七円	一三二、四二九円	一五九、九三一円	一四八、二六〇円

酒税	清涼飲料税	砂糖消費税	織物消費税	臨時利得税
三、七七〇、七七二円	五五、一九〇円	三、九八〇円	一七、七九八円	四九九、六二三円

二、縣費 明治三十年十月縣制實施當時の縣費は六十八万七千圓にして税收入の如きも五十五万

一千圓に過ぎざりしが爾來時勢の進展に伴ひ經費も逐年增加し其の間多少の消長ありと雖近年著しく增加す、昭和十四年度當初豫算八、二五五、〇〇〇圓（特別會計を除く）稅收入四、三二一、八八九圓にして明治三十年に之を比すれば前者一三倍後者七倍八に當れり、縣費一人當七圓〇三稅一戶當一八、三五なり、歲出に於ては教育費二割四分二厘警察費一割二分八厘土木費一割二分四厘勸業費一割四厘縣債七分八厘を占む又稅收入は歲入の五割二分に當る

昭和十四年度歲入歲出豫算

科目	金額	百分比
歲入		
稅		
國稅附加稅	二、一一一、三八五円	二五・六
家屋稅	一、一八六、六二三	一四・四
營業稅	一〇四、四〇六	一・三
特別地稅	二一九、四九九	二・六
雜種稅	六八九、九七六	八・三
計	四、三二一、八八九	五二・二
其の他		
國庫下渡金補助交付金、助成金	一、六一九、〇七六	一九・六
財產收入	二三、九四四	〇・三
使用料 手數料	八七五、七四五	一〇・六
雜收入	三二七、六九〇	三・九
寄附金	一〇七、〇五一	一・三
縣債	七九一、〇〇〇	九・六
負擔金	二六、五八四	三・二
其の他	一七二、〇二一	二・一
計	三、九四三、一一一	四七・八
合計	八、二五五、〇〇〇	一〇〇・〇

科目	金額	百分比
歲出		
縣職員費	五一九、九八三円	六・三
警察費	一、〇五八、八九八	一二・八
土木費	一、〇二〇、三五二	一二・三
教育費	二、〇〇三、二三七	二四・二
衛生及病院費	一二五、四五五	一・五
勸業費	八五八、八四一	一〇・四
會議費	三九、八二〇	〇・五
社會事業費	四〇、二五二	〇・五
縣稅取扱費	一二六、七一七	一・五
土木補助費	三四〇、四七〇	四・一
教育補助費	一三三、九八二	一・六
衛生補助費	四八、一八〇	〇・六
勸業補助費	四七九、四三九	五・八
社會事業補助費	九〇、一四〇	一・一
統計補助費	一二、六八三	〇・一
縣債費	六四七、九三九	七・八
其の他	七〇八、六一二	八・六
合計	八、二五五、〇〇〇	一〇〇・〇

三、市費　明治二十二年十二月二十五日市制施行當時は松山市のみなりしが大正九年二月十一日今治市、大正十年八月一日宇和島市、昭和十年二月十一日八幡濱市、昭和十二年十一月三日新居濱市何れも市制を實施するに至り現在五市となる

昭和十三年度に於ける五市の豫算總額二、六八四、四二八圓にして松山市七一七、五六九圓今治市四六〇、八一八圓宇和島市六八五、〇二〇圓八幡濱市四三一、七七七圓新居濱市三八九、二四四圓なり歲入中稅收入一、七一〇、三〇二圓にして六割四分を占め平均一戶當三〇圓七二なり、市稅松山市五〇二、三九九圓一戶當二七圓九九今治市三四五、一〇二圓一戶當三〇圓三六宇和島市三六六、八一六圓一戶當二八圓九七八幡濱市二〇三、七三六圓一戶當三〇圓六五新居濱市二九二、二四九圓一戶當四一圓四〇なり

昭和十三年度市歲入歲出豫算

歳入

科目	金額	百分比
市税	一、七一〇、三〇二円	六三・七
財産収入	一八、二九八	〇・七
使用料 手数料	一七八、二〇〇	六・六
交付金	七二、七二九	二・七
國庫下渡金	一八八、四四九	七・〇
國縣補助金	一〇五、三一一	三・九
寄附金	九、一六八	〇・三
繰入金	一〇、一八五	〇・四
財産賣拂代	一〇七、三五九	三・九
繰越金	九、八三三	〇・四
公債	一三五、〇〇〇	五・〇
貸付金戻入	三、六五七	〇・一
其の他	一三六、〇一七	五・一
計	二、六八四、四二八	一〇〇・〇

四、町村費　明治二十二年十二月二十五日町村制實施當時二九六町村なりしが其の後廢置分合に依り昭和十三年末現在三五町村となれり、昭和十三年度町村豫算歳入二、六二九、六五四圓にして內稅收入五割

歳出

科目	金額	百分比
役所費	三八一、四五三円	一四・二
土木費	二〇一、八七〇	七・五
教育費	一、〇六四、二八六	三九・六
衛生費	一四三、三一七	五・三
勸業費	二四、六五五	〇・九
警備費	四〇、七〇七	一・五
基本財産造成費	八、二六三	〇・三
社會事業費	九五、一〇九	三・五
水道費	—	—
公債費	四六六、〇五六	一七・四
財産費	八、六一三	〇・三
諸稅負擔	四、二七三	〇・二
豫備費	二五、三三一	〇・九
其の他	三三一、四六五	八・二
計	二、六八四、四二八	一〇〇・〇

公分　國庫下渡金　一割三分　交付金補助金　三分　町村債　四分　に當り町村稅一戶當四圓六四錢なり、歳出に於ては敎育費　四割弱　を占め役場費　一割六分　土木費　五分　公債費　分　に當る

町村基本財産は毎三年の定期調査にして昭和十一年三月末現在一〇、五四〇、三六五圓にして內土地建物價額四、七〇〇、六六六圓　有價證券及現金三、九三八、一五九圓　其の他一、九二一、五四〇圓なり

昭和十三年度町村歳入歳出豫算

歳入

科目	金額	百分比
町村稅	七、四二四、九〇〇円	五八・八
夫役現品	五、八三三	〇・一
財産收入	一九九、八四二	一・六
使用料 手數料	三五九、〇一八	二・八
國庫下渡金	一、七一〇、一二七	一三・五
交付金	三九、〇四六	〇・三
國縣補助金	四六〇、〇八一	三・六
繰入金	一五五、五六八	一・二
財産賣拂代	一九八、七一四	一・六
繰越金	五二〇、三六四	四・一
雜收入	一五四、三七〇	一・二

歳出

科目	金額	百分比
神社費	五六、八三五円	〇・四
役場費	一、九三三、三一一	一五・八
會議費	七六、七三一	〇・六
土木費	六七六、六五五	五・三
敎育費	五、六五六、〇四六	四四・八
衛生費	三九一、七九九	三・〇
勸業費	九一、七五五	〇・七
警備費	二〇八、五七〇	一・七
基本財産造成費	二一四、〇九六	〇・九
諸稅及負擔	六八、二九九	〇・五
公債費	一、二〇四、四〇一	九・五

町村債	五四七、〇一四	四・三	財産費	六二、三四三	〇・五
貸付戻入	一八四、九一八	一・五	社會事業費	二二四、五五三	一・八
其の他	四七九、八四一	三・七	豫備費	一七八、三四二	一・四
			其の他	一、六三五、九二八	一二・九
計	一二、六二九、六五四	100・0	計	一二、六二九、六五四	100・0

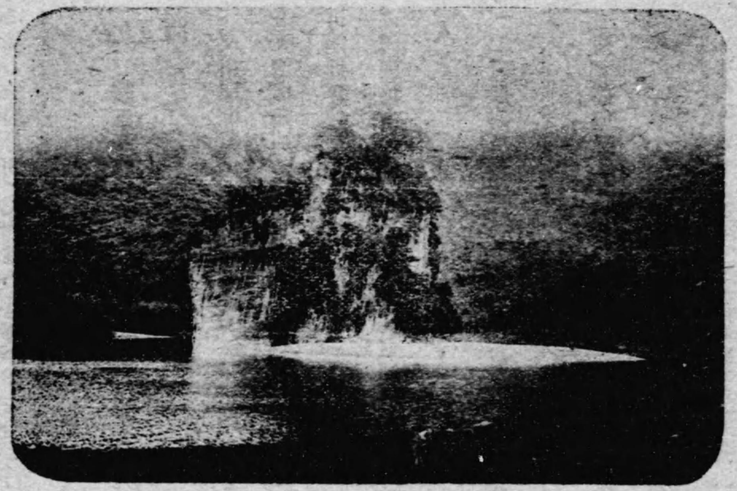
隣縣との地方費比較（昭和十三年度豫算）

	府縣費	市費	町村費	總額	一戸當	一人當
愛媛縣	九、〇五九、五一七円	四、二八五、〇三〇円	一三、三八四、三七八円	二六、七二八、九二五円	一〇九・九〇円	二三・九四円
高知縣	六、四七一、三二八	一、三八〇、六九二	五、五一八、〇八五	一三、三六九、一〇五	八五・四九	一八・七〇
香川縣	六、四三三、八九六	二、五三四、三四七	六、一九九、九六三	一五、一六八、二〇六	九九・六六	二〇・二六
德島縣	七、〇五二、七二四	二、五九三、三九四	七、五一二、〇三一	一七、一五八、一四九	一一七・六五	二三・五四

第八章　警察及衛生

第一節　警察

一、警察官署及警察職員　昭和十二年末警察署 一七 警部補派出所 五 巡査部長派出所 二四 巡査派出所 五三 水上巡査派出所 六 巡査駐在所 二六七にして警察部長 一人 警視 五人 防疫醫 二人 技師 六人 技手 二八人 屬 九人 警部 三二人 警部補 五三人 主事補 二人 巡査部長 一一五人 巡査 五七八人 雇 四一人 其の他 一九人而して巡査定員一人當人口 一、五一八人なり



【御三戸】

二、犯罪　昭和十二年に於ける刑法犯發生件數 一〇、九七七 檢擧件數 一〇、九一三なり、尙規則違反 六、〇三六人 男 五、五七六人 女 四六〇人 にして內法律違反 二六人 勅令違反一人省令違反 三、〇三一人 縣令違反 二、九七九人なり

三、火災　昭和十三年に於ける火災度數 二二五にして內失火 一九三 不審火 一〇 放火 一一 其の他 一一なり

家屋數は全燒 二三三棟 半燒 八七棟 之れが損害見積額 三七七、三三〇圓に達す

原因別に見れば使用火不始末 一一五 最も多く吸殼 八 燈火 二五 不明火 一〇 弄火 二三 放火 一一 等を主なるものとす尙一箇年を通じて見れば十二月、一月、二月

に多く三箇月間に亙〇度あり本年中に於ては七月、八月、九月最も少し

第二節　衛生

一、醫師及齒科醫師　昭和十三年末に於ける醫師は七四三人（男七一四人　女二八人）内開業醫七二六人にして人口一、七四四人に對し醫師一人の割合を示す

又市部開業二〇七人　町部一七〇人　村部二五人にして之が分布農村に少く開業醫なき村落さへあり而かも交通機關の整備と相俟つて收容又は往診により僻地に於ける缺陷の緩和を計りつゝありと雖是等の可能性を缺ぐの地あり

尚齒科醫師は三六人（男二五人　女一一人）にして診療に從事する者の分布狀況は市部一〇六人　町部九人　村部六人なり

二、産婆及看護婦　昭和十三年末現在産婆一八七人にして之が分布は市部三四人　町部一五人　村部四〇人なり、看護婦一、四三四人なり

三、藥劑師及藥業者　昭和十三年末現在藥劑師は一九二人（男一四九人　女四三人）にして之が分布狀況（藥劑師の業務に從事するもの）は市部七人　町部三人　村部一九人　病院其の他三人なり

藥業者は藥品販賣業者三五七人　製藥業者七〇人あり

四、鍼灸按術業者　昭和十三年末鍼術、灸術、按摩業者一、七二六人にして晴眼者（男六五三人　女三五九人）（尚晴眼者中には）柔道整復術者男一七人あり

五、傳染病　昭和十三年中の傳染病患者は一、八七人にして内死亡者は四三人　患者百に付死者二十三人の割合を示す、病類別に之れを見れば赤痢（患者五四〇人　死亡二九人）腸チフス（患者八五四人　死亡一五四人）パラチブス（患者二一人　死亡三人）痘瘡（患者一　死亡一）流行性腦脊髓膜炎（患者六八　死亡五人）猩紅熱（患者一〇二人　死亡三人）ヂフテリア（患者三三四人　死亡四九人）なり

昭和十三年末に於て傳染病院二隔離病舍三七にして外に公立病院四　私立病院三　娼妓病院一　精神病院二あり

道府縣歲出豫算（昭和十三年度）及諸稅負擔（昭和十一年度）

道府縣	直接國稅		府縣稅		市町村稅		道府縣歲出	
	稅額	一人當	稅額	一人當	稅額	一人當	歲出	
	千円	円	千円	円	千円	円	千円	円
北海道	八、二四四	二・六四	六、六四八	二・一三	一六、二八四	五・二三	一四、四二九	四・六二
青森縣	一、五二八	一・三四	二、八二四	二・八七	四、二四五	四・三一	七、九五七	七・二七
岩手縣	一、七四三	一・六七	二、六五〇	二・五〇	三、九六〇	三・七三	七、二二七	六・九三
宮城縣	二、八三一	二・五二	三、六四七	二・九一	五、三七〇	四・二八	一〇、六六三	八・五二
秋田縣	二、八三三	二・六九	三、三五〇	三・二〇	五、六二一〇	五・三五	一〇、四九六	九・五二
山形縣	三、四九八	三・二一	三、八一六	三・三九	五、四八七	四・八八	八、九四二	七・九二

福島縣	三、三三二	二・〇二	六、三九九	四・〇二	一二、八九四	二・〇七	九、一四〇	一・九〇	一、九〇
茨城縣	三、一六〇	二・〇二	六、〇二三	三・八六	九、〇〇六	二・〇五	五、〇九六	一・〇八	一、〇八
栃木縣	二、八二四	二・三五	四、六四一	三・八五	八、二二六	二・三五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
群馬縣	三、九七八	三・一七	五、六八六	四・三三	八、三三四	二・四九	四、二九九	一・〇八	一、〇八
埼玉縣	三、八四八	二・四九	七、二六三	四・〇三	九、九六九	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
千葉縣	三、八二三	二・四五	六、三〇三	四・〇三	八、五四四	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
東京府	一七六、四〇六	二六・八五	五六、一五一	四・一四	七三、四五五	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
神奈川縣	一四、二八八	七・五八	一二、九一六	四・六三	一四、六六五	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
新潟縣	七、八四五	三・九一	一〇、二〇六	三・九九	一五、九八七	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
富山縣	三、一一七	三・八八	五、一一四	四・八九	一〇、四六六	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
石川縣	二、九六五	三・八五	五、四八八	四・七〇	八、二八七	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
福井縣	二、四九五	三・八二	三、四九九	四・四二	五、五八八	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
山梨縣	一、二五六	一・九〇	二、四四九	三・六七	三、七七四	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
長野縣	三、七四一	二・一八	九、〇四八	三・七八	一三、〇四四	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
岐阜縣	三、二九六	二・六七	六、五二四	三・七〇	一〇、二七九	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
靜岡縣	五、七二〇	二・九〇	一八、八七二	四・〇九	一二、九五六	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
愛知縣	三三、四〇一	八・〇〇	六、三三一	三・八二	三、四二九	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
三重縣	四、四四九	三・七八	五、七二〇	四・七四	三、三九五	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
滋賀縣	二、八二〇	三・九四	四、三八七	四・七四	三、三九五	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
京都府	一五、六二八	九・〇一	二、三三九	五・一九	八、九九六	二・四五	四、二九九	一・〇八	一、〇八
大阪府	九二、四七四	二〇・七六	三五、六七一	八・〇一	二四、八九四	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
兵庫縣	三一、七八〇	一〇・六五	二〇、五六五	六・九〇	二八、一五八	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
奈良縣	二、〇四三	三・二七	三、九四三	四・八〇	二、七一	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
和歌山縣	二、三五七	二・七一	二、八二四	五・七六	七、五七三	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
鳥取縣	一、三〇九	二・六七	二、八二四	六・一〇	七、六七一	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
島根縣	二、一三三	二・八五	四、五七〇	六・〇九	二一、三三八	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
岡山縣	六、五三一	四・八六	八、一七三	六・〇九	二五、二八四	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
廣島縣	七、九七〇	四・三六	一二、〇〇四	六・〇三	二五、一一三	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
山口縣	六、五四九	五・四五	七、二八三	六・〇六	二五、一一三	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
德島縣	一、四七三	二・〇三	四、二六六	五・八三	七、〇五三	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
香川縣	二、三二九	三・〇八	三、四四五	四・五八	六、四三四	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
愛媛縣	四、一五四	三・三五	五、九六七	四・一〇	九、〇五九	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
高知縣	一、五七三	二・二〇	二、八二一	三・九四	六、四七〇	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
福岡縣	一五、六八二	五・五九	一七、四三三	六・二三	二四、二〇〇	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
佐賀縣	二、〇七三	三・〇三	四、〇八四	五・九六	六、二二一	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
長崎縣	三、九六四	三・〇三	六、八四四	五・二三	七、九八二	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
熊本縣	四、五四六	三・二六	七、四九一	五・三七	一〇、四九一	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
大分縣	二、五七五	二・八一	五、一〇八	五・一七	八、七九五	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
宮崎縣	一、七一四	二・〇五	三、九五三	四・七七	七、九五四	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇
鹿兒島縣	三、〇四〇	一・九〇	七、〇四九	四・四一	八、六八〇	五・〇四	二一、九四〇	四・七四	一五、九四〇

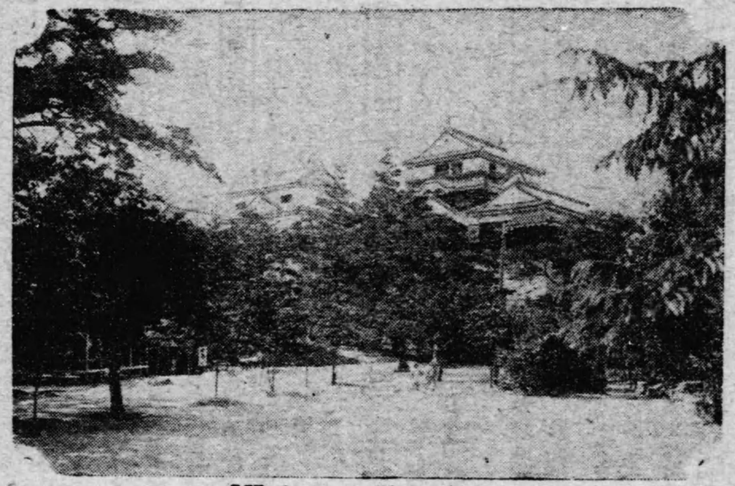
沖繩縣	三三一	〇・五六	八三二	一・三八	一、二四〇	一・九二	六八	一、九三三

附錄

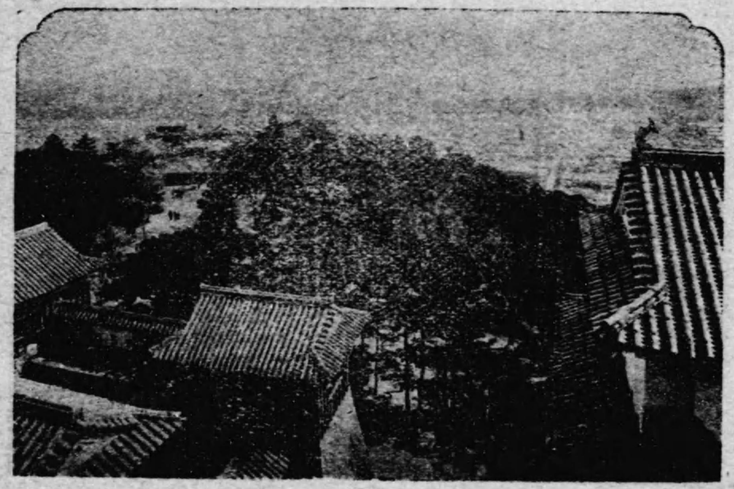
史蹟名勝天然記念物概覽

並歷代長官

【景全城山松】



【松山公園と天主閣】



【松山市全景】

松山市勢

面積戸口—面積　一方里一六九　世帶數一八、三六四
人口　八一、九四〇
重要生產物—綿織物　二、〇九〇、九三七圓　菓子　九六六、四七四圓　捺染物　七八、四七五圓
諸官衙—愛媛縣廳、松山警察署、工業試驗場、松山測候所、農產物檢查所、同松山支所、蠶業取締所、同松山支所、松山土木出張所、松山財務出張所、愛媛縣農繭檢定所、松山職業紹介所、愛媛縣警察練習所、木炭檢查所松山支所、松山稅務署、松山聯隊區司令部、歩兵第二十二聯隊、松山陸軍病院、松山憲兵分隊、松山地方裁判所、同區裁判所、同供託局、松山刑務所、松山郵便局、廣島地方專賣局松山出張所、商品陳列所、松山市役所
諸學校—松山高等學校、愛媛縣師範學校、同附屬小學校、同附屬幼稚園、縣立松山中學校、北豫中學校、松山高等女學校、松山城北高等女學校、松山商業學校、松山工業學校、青年學校　二、小學校　九、私立松山高等商業學校、濟美高等女學校、東雲高等女學校、松山技藝女學校、松山商業女學校、松山夜間中學、愛媛縣立盲啞學校、愛媛縣學館、幼稚園　五
名所舊蹟—松山城趾、石手川公園、阿沼美神社、大寶寺、子規埋髮塔、足立重信の墓、十六日櫻
鐵道—國有鐵道豫讃線松山驛、省營バス、豫土線（松山佐川間起點）
私設伊豫鐵道の高濱線、横河原線、森松線、郡中線（各線基點）電車松山驛道後間　松山市驛高濱間

松山公園

舊松山城趾にして市の中央にあり全山樹木繁茂し頂上の城櫓壘壁今尚舊形を存し宏壯雄大にして眺望絶佳、山の高さ七十二間、周圍三十町十五間其の面積五万九千坪なり。

松前城主加藤嘉明（十万石）關ヶ原の戰功により二十万石に加封せられ慶長八年此の地に五層の城廓を築きて移居、寛永四年嘉明會津に移封せられ、同年蒲生中務少輔忠知二十万石を以て入城、同十一年忠知京師に歿し嗣子なく、同十二年松平隱岐守定行十五万石を以て桑名より入城、世襲して定昭に至り城邑を奉還す、定行入國のさき城山は恰も赤土山の如くなりしかば臣下に命じ麥、粟等を蒔かしめ鳥類を集めて其の糞により草木の繁殖を計り且つ日向の松實を蒔き子孫と共に其の繁殖保護に努めしかば比年ならずして欝蒼たる林相を爲すに至る、降て寛永十九年天主閣を改築して三層となせしも天命四年の雷火に天主閣及本丸を燒失す、文政三年更に工を起し三十五年の久しきに亘りて安政元年漸く竣工せしもの即ち現在の城廓なり、（昭和八年七月怪火の爲め隅、多門、北隅櫓、十間廊下、南隅櫓、小天主を燒失し之が復興計畫中なり）建造物中加藤嘉明の築造に繫るものは僅に筒井門並乾櫓を存するのみ、明治維新廢藩の際縣は之を公園となせしも同十九年陸軍省所管となし其の後明治四十三年松山市貸下を受け現今市の公園として經營せり、大正十二年久松定謨伯大藏省より拂下を受け更に松山市に寄附する處となる、城廓は昭和十年五月國寶に指定せらる。

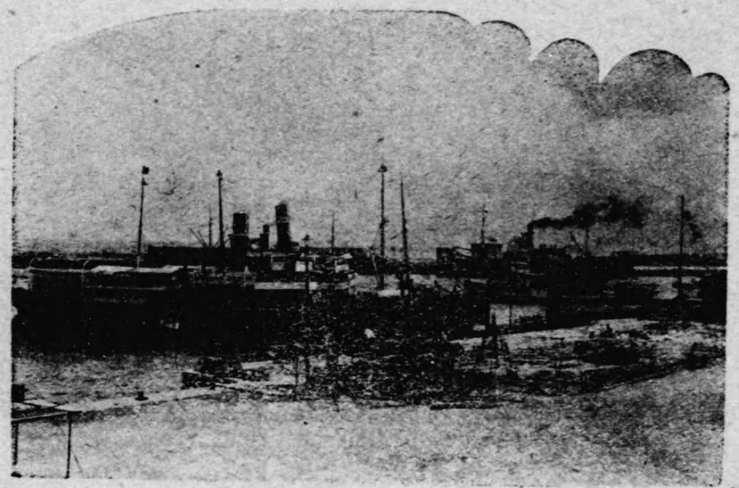
阿沼美神社　松山市宮古町に在る縣社延喜式内の大社にして最も歴史に富み大山積命を祭る、境内廣く古松鬱蒼として森嚴を極む、往古勝山の巓に在りしを慶長八年現所の地に遷座累代松山城主の尊崇篤く神田の寄進神社の造營等屢々なり。

大寶寺　松山市南江戸に在り大寶元年の建立にして崇德院讃岐よりこの地へ行幸の時御車を返し櫻を叡覽ありて「名にしほまたも來て見ん花の春夕影殘す雪の古寺」の御製あり一に古寺といふ、堂前の姥櫻は聞ゆる名花にして當寺安置の釋迦如來、阿彌陀如來の二像は國寶なり、本堂は特別保護建物となれり。

子規埋髮塔　「痰一斗へちまの水も間にあはず」の辭世句を殘して明治三十五年九月十九日東京上根岸の寓居に逝きし俳人正岡子規の埋髮塔は松山市末廣町一丁目正宗寺境内に在り、大正十五年本堂に接續して子規堂を建設せられ子規の青年時代の面影を偲ぶに足るものあり、子規名は常規慶應三年九月十七日松山市大字新玉町に生れし明治文壇の異彩なり。

足立重信の墓　松山市の北方山越來迎寺境内に在り足立重信は加藤嘉明の重臣にして松山築城の際重信川、石手川を改修して民生に資したり重信川の名こゝに因す、又松山城廓の結構經營に力を致し以て松山市の開市を見るに至らしめり、重信は寛永二年十一月十七日を以て逝く大正八年十一月正五位を追贈せられ大正十四年同寺境内に頌功記念碑を建設せり。

十六日櫻　松山市の北方山越龍穩寺庭前に在り毎年舊正月十六日に開花するを以て此名あり、其の由來は往昔此里に花鳥風月を友として餘生を樂しむ翁或年病床に在り正月十五日夜吾子吉平を呼びて自分はゝや八十黄泉に旅立つことは遠程も惜しくはないがただ常に愛してゐる庭前の櫻花の開期を待たずして逝くことが誠に口惜い花にも靈あらば心して咲けよと嘆ず、吉平其の情に堪へず終夜樹下に井水を被りて身を淨め祈願せしに十六日の拂曉見事に開花したり、父子之を眺めて狂喜せんばかりに打喜び翁の病忽ち去りて更に十年の齡を保つことを得たりと傳へられ爾來毎年正月十六日には必ず花を開くを例とし觀客多數なり。



【今治港】

今治市勢

面積戸口—面積　〇、八五一方里　世帶數　一一、〇二〇
人口　五一、六〇二

重要生産物—綿織物　二七、六二三、六〇五圓　捺染物　二、五〇一、七一三圓　漁獲物　四七五、四四九圓　菓子　三一五、〇〇〇圓

諸官衙—今治警察署、今治區裁判所、今治稅務署、今治郵便局、神戸稅關今治支署、今治土木出張所、今治財務出張所、農産物檢査所今治支所、今治職業紹介所、今治市役所

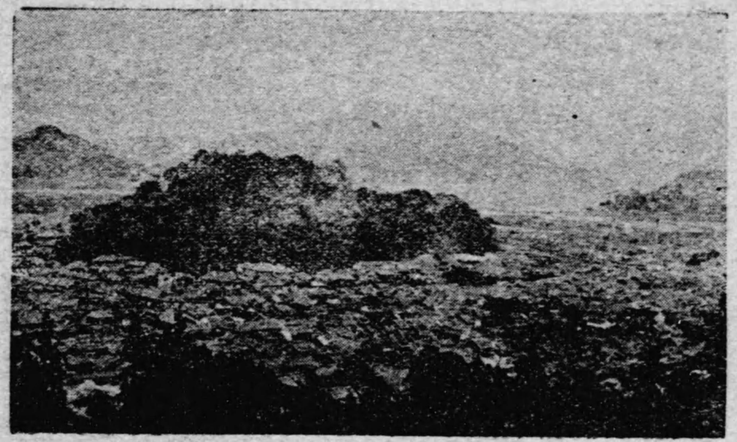
諸學校—縣立今治中學校、今治高等女學校、組合立越智中學校、青年學校　二、小學校　六、私立今治實科高等女學校、今治實踐商業學校、今治精華高等女學校、今治中等夜學校、幼稚園　三

名所舊蹟—今治城趾、天保山、姫坂神社、東禪寺

鐵道—國有鐵道豫讃線今治驛

港——今治港（大正十一年二月開港場となる）

本港は天保二年藩主定茂新地港に波除石垣を築造し翌年七月竣工せるものにして其の後若干の補修を加ふる所ありたるも規模狹少にして和船の碇繫に便なるのみ汽船に至りては港外に碇泊するの止むなく不便尠からざりしが市に於て築港を計畫し大正九年より防波堤の築造、港内浚渫、埋立、棧橋の築造をなし防波堤被覆内面積二〇二、六三九平方米にして面目一新せり。



【宇和島市景】

宇和島市勢

面積戸口—面積　三方里五一二　世帶數　一一、一二七
人口　五一、二八〇

重要生產物—綿織物　一、六〇二、二五三圓　繭　四二四、三八二圓　漁獲物　一四七、五八二圓

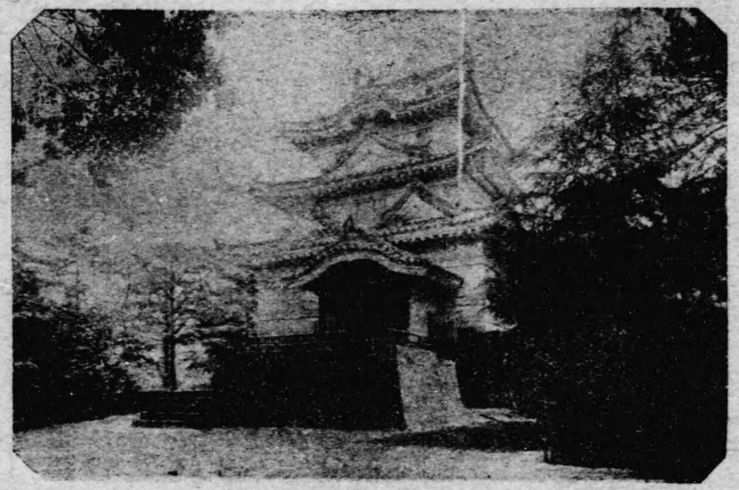
諸官衙—宇和支廳、宇和島警察署、宇和島區裁判所、宇和島稅務署、宇和島營林署、宇和島郵便局、愛媛縣水產試驗場、松山刑務所宇和島支所、松山測候所宇和島支所、愛媛縣蠶業取締所宇和島支所、農產物檢查所宇和島支所、宇和島財務出張所、宇和島土木出張所、木炭檢查所宇和島支所、宇和島職業紹介所、宇和島市役所

諸學校—縣立宇和島中學校、宇和島高等女學校、宇和島高等家政女學校、市立宇和島商業學校、青年學校　六、小學校　八、幼稚園　四

名所舊蹟—宇和島城、和靈神社、宇和津彥神社、天赦園、滑床

鐵道—國有鐵道宇和島線（基點宇和島吉野間）

港———宇和島港



【宇和島城（天主閣）】

宇和島城

宇和島市（元板島と稱す）大字丸之內にあり、城山高さ海拔三十八間餘、周圍七百四十四間、地積十町二反四畝二十一步、城廓內一帶に樹木數多密生す、從來枯損木の外伐除をなさず爲に大いに繁茂す、戰國時代板島丸串城と稱し四國寺宣久（高六千六百石）城主たりしが天正十五年戶田勝隆に屬す、文祿四年藤堂高虎（七万石）此の地に封ぜられ宇和島城（一名鷄島城）と稱す、次に富田知信城主たり、元和元年伊達秀宗（十万石）居城寬文年間伊達宗利之を改修す、維新後陸軍省の所管なりしを後伊達宗德拂下を受けて所有現今に至る。

天主閣、追手門、上り口の門、城井は完全に存在す。

天主閣、追手門は昭和九年一月國寶に指定せらる。

【雪輪の瀧（下より寫したるもの約全景）】

宇和島市大字丸穗字野川の滑床山にあり國有林地積千百二十八町八段四畝二歩にして市を距ること三里半一日にして行遊を爲すことを得。

瀑布さいふよりも奔湍と云ふべく、急斜の石上を奔流すること約三十間、幅六七間其の流水點々渦紋を爲して下る其の水上に奔湍六七段あり何れも流花水紋をなし湍末の本流五六歩の右傍に接して銚子の深淵あり、圓形の淵潭にして水色紺碧其の深さ知るべからず探險家も未だ淵中に入りて其の底を極めたるものなく水勢激甚なれば其の深度測量し得ず暫く傍に佇立せんに凄愴の氣に打たる如何に剛膽の者と雖も單獨にて探訪するものなしと云ふ、此の瀑淵の邊樹林蓊鬱として繁茂し秋霜する時は紅葉峽谷を點綴し水色と相映じ美觀比なし、秀麗美觀の點に於て縣下此の山水に勝るものあらざる可し。

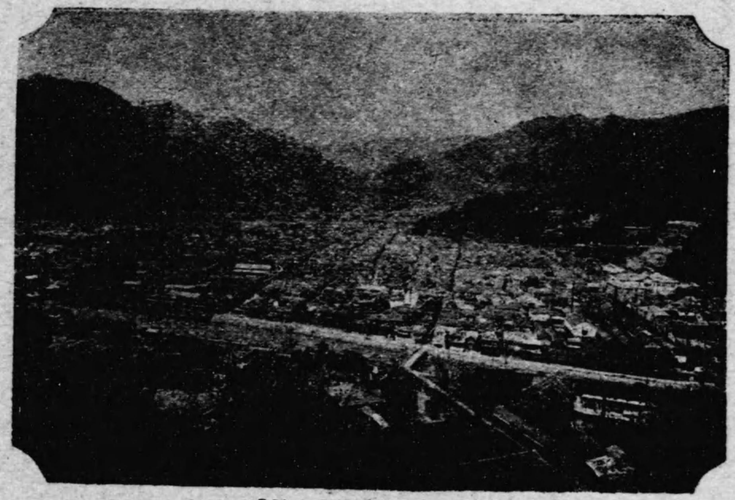
其の狀雪輪の輪形をなして降るが如く實に奇觀美景雪輪の稱ある所以なり、

【和霊神社】

和霊神社

宇和島市大字八幡字鎌江に在り、伊達家の忠臣山家公頼を祀る神徳を渇仰するもの歳と共に多く遠くは近畿、中國、九州より到り一ヶ年賽客七十万を下らず。公頼通稱を清兵衛と稱す、伊達政宗の臣なり、爲人端正篤醇廉介以て身を持す、政宗の子秀宗宇和島に封ぜらるゝに際し家老職として之に隨ふ其の封土に就くや公頼万勵治を圖る、佞臣之を憚ばず從て讒構し公頼遂に非命に斃る。

後人其の忠烈を欽仰し崇敬日に盛なり。



【八幡濱市景】

八幡濱市勢

面積戸口—面積　二方里五　世帶數　六、五三七
人口　三〇、五〇〇

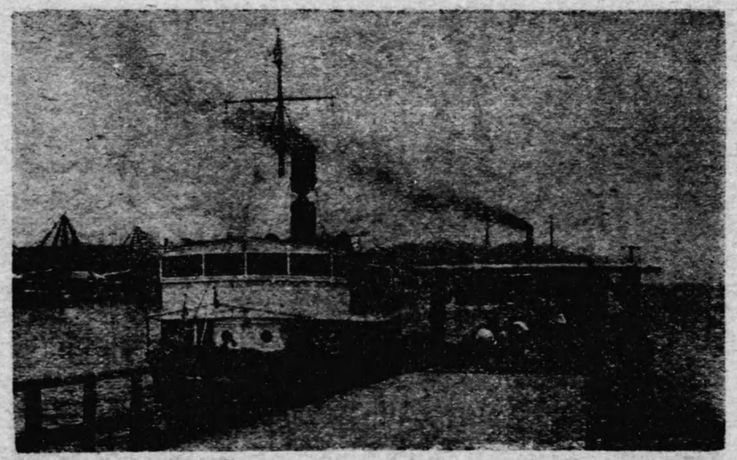
重要生產物—綿織物　六、三四七、八六〇圓　蒲鉾竹輪　七〇九、〇〇〇圓　漁獲物　一、一〇三、六六五圓　生糸一、二五四、五四五圓

諸官衙—八幡濱警察署、八幡濱稅務署、八幡濱區裁判所、八幡濱郵便局、蠶業取締所八幡濱支所、農產物檢查所八幡濱支所、八幡濱財務出張所、八幡濱職業紹介所、八幡濱市役所

諸學校—縣立八幡濱商業學校、八幡濱高等女學校、青年學校　六、小學校　七

鐵道—國有鐵道豫讃線八幡濱驛

港———八幡濱港



【新居濱市景】

新居濱市勢

（昭和十二年十一月三日市制實施）

面積戸口—面積　一方里一九二　世帶數　六、二三〇
人口　三一、六〇四

重要生產物—肥料　二四、五七五、七〇五圓　他に人造絹糸、藥品、諸機械器具等

諸官衙—新居濱市役所、新居濱職業紹介所、新居濱郵便局、角野警察署

諸學校—縣立新居濱工業學校、新居農業學校、市立新居濱高等女學校、青年學校市立四、私立三、小學校市立四、私立一

鐵道—國有鐵道豫讃線新居濱驛

港———新居濱港

【道後温泉】

温泉郡勢

面積戸口—面積　三九方里八六六　世帶數　二九、三七六
人口　一四五、〇七一

重要生產物—米　七、三〇六、五三四圓　綿織物　二、五一四、〇二五　麥　二、五七四、六八三圓　柑橘　一、一六八、六六八圓　酒　一、一四六、〇八〇圓

諸官衙—三津警察署、愛媛縣農事試驗場、廣島遞信局海事部三津濱出張所

諸學校—愛媛縣女子師範學校、同附屬小學校、同附屬幼稚園、縣立松山農業學校、町立北條實科女學校、町村立青年學校　五三、小學校　五二、幼稚園　一

名所舊蹟—道後温泉、道後公園、伊佐爾波神社、湯神社、一遍上人誕生地、石手寺、太山寺、岩堰、湧ヶ淵、白猪の滝、唐岬の滝、興居島、鹿島、腰折山、星の岡、三津の朝市、荏原城趾

鐵道—國有鐵道予讃線淺海驛、伊豫北條驛、粟井驛、堀江驛、伊予和氣驛、三津濱驛
私設　伊豫鐵道松山高濱間（電車）、松山横河原間、松山森松間、道後松山驛間（電車）

港———北條港、堀江港、高濱港、三津濱港

温泉郡道後湯之町字湯月に在り、面積一段八歩、源泉は第一、第二の二箇所より湧出し、一晝夜に付約三千二十四石に及び之を鷺乃湯、養生湯、神之湯、鷺之湯、西湯の各浴槽に分湯す、外に皇族御專用の又新殿の浴槽在り。

道後温泉は上古大巳貴命、少彦名命の二神國土經營の爲出雲より播磨を經て、此の地に來らせ給ひし時少彦名命病に罹らせ給ひしかば大巳貴命直に温泉を汲みて浴せしめしに暫くにして蘇生し給ひ歌を詠じて「眞暫假寢哉」と宣ひ、勢猛く側の石を踏みて起ち給ひたりと云ふ、今尙其の石温泉の側に在り、之を靈の石と稱ふ、如斯上古より靈驗著しき歷史を有し御歷代の天皇、皇后、皇太子にして此の地に行幸啓在らせ給ふこと屢なりき、蓋し此の地を外交の策源地として、熊襲、韓土の經營に資し給ひしによれり。

推古天皇の御宇聖德太子此の地に行幸す、太子命じて伊佐庭の岡に碑を建てゝ其の事を勒せしむ、其の後何時しか碑石の所在不所となりたるも碑文は釋日本紀に明かなり、其の後地震の變災によりて温泉の閉塞せしこと久し、或時一鷺其の脛を傷ひ朝夕來りて溪水に灌し、日を累ねて癒え去りしかば覩る人之を奇とし其所を掘鑿して再び泉源を探究して、復舊するを得たり、其の後震災の爲一時温泉の止まりしこと屢ありき、寛永十五年松平隱岐守定行命じて砌石浴地を修營し、其の上に屋を架し三區域と爲し且つ士庶の分を別ち男女の混浴を禁ず、現在の建造物此に起源す、其の後明治五年改築して新に櫓を架し浴客の休憩に便し之より入浴料を徵するに至る、同十一年更に浴室の增設を爲し、同二十五年再び改造して大に輪奐の美を整へり、其の一部の改增築をなし現今に至る、本温泉は町營に係り昭和十一年中に於ける浴客　八五四、一二八人之が收入　五九、五七三圓なり。

明治三十六年、大正天皇猶皇太子に在らせ給ふ時此の地に行啓あらせられたり、本温泉は泉質單純泉にして殆ど透明なり。著名の温泉として其の名古より人日に輪奐せられ入浴の爲此の地に來る者頗る多し。

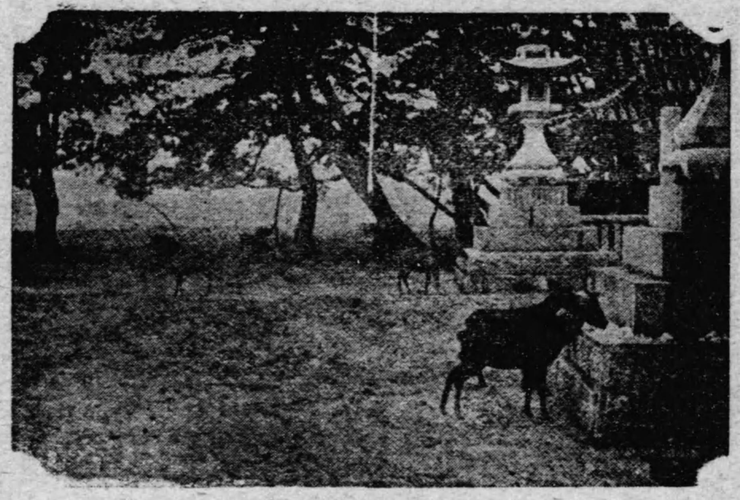
十一月　今上天皇陛下皇太子に在らせ給ふ時、此の地に行啓車駕を駐めて又新殿に臨御あらせらる、大正十一年

【寶嚴寺（一遍上人誕生地）】

寶嚴寺

温泉郡道後湯之町湯月谷に在り、元誓願院と云ひ天智の御宇の創立と傳ふ延應元年四月八日時宗の開祖一遍上人誕生の靈跡として其の名高し、昔は子院十二坊ありて盛況を呈したりと云ふ、其の中林光庵に安置せられたる一遍上人の木像は今猶當所に保存せられ國寶に指定せられたり、其の像の頸の柄の銘は左の如し。

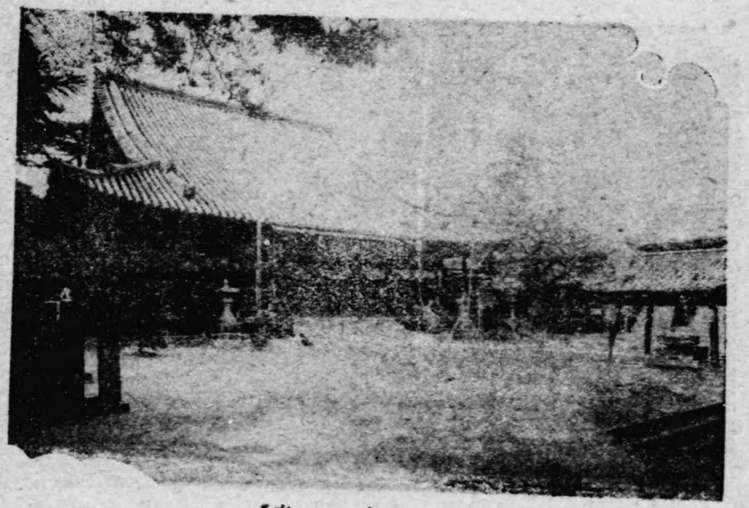
當住
其阿彌陀佛
檀那　通直
願主　彌阿彌陀佛
文明七年乙未十一月十九日



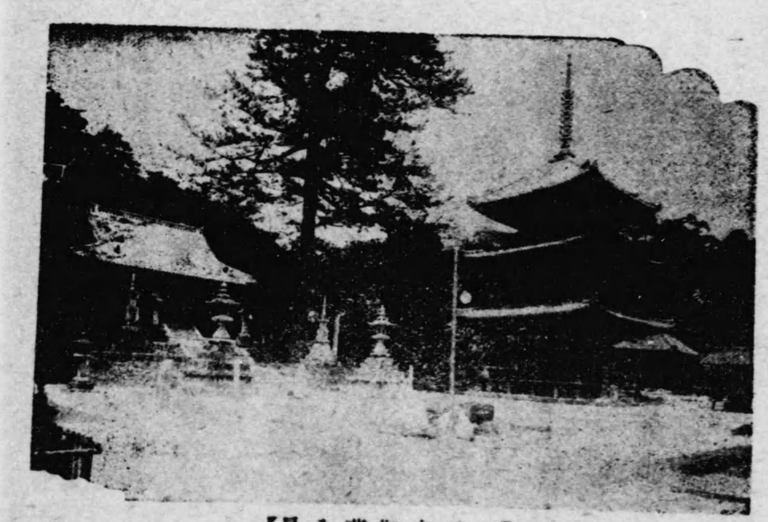
【鹿島の神鹿】

鹿島の神鹿

鹿島は温泉郡北條町大字辻、北條町の海岸を距ること四方四町の處に在り、面積十九町七段八畝六歩高さ三百八十尺、周圍約十五丁にして島の西半は花崗岩、其の東半は安山岩の露出多し、南西北の三面は絶壁をなし、東側のみ稍緩斜にして、其の麓に鹿島神社を奉祀す、島の東北頂に近く一小平地あるは蕊鹿島城趾にして、曾て海上豪族の活躍を恣にせし所なり、全島老樹繁茂し、魚付保安林として保存せらる、神鹿は一時五十頭を算せしも近時著しく減少して十數頭棲息するのみ、鹿に付ては準據すべき記錄全くなきも一説に常陸國より鹿島神社を遷せし際共に鹿を放養せりと又松山藩主久松氏軍神鹿島神社を崇拜し記念の爲に奉納せりともいふ。



【太　山　寺】



【石手寺伽藍全景】

太山寺　温泉郡和氣村大字太山寺に在り天平十一年僧行基勅を奉じて創建す、鳥羽天皇のとき七堂伽藍竣成して龍雲山太山寺と稱せり、四國靈場五十二番の札所として寺は經ヶ森の中腹樹木鬱蒼たる別天地に在り、本堂と仁王門は國寶建造物にして歴代勅納の佛軀本尊十一面觀音立像外五軀は國寶となれり。

石手寺　温泉郡道後湯之町に在り四國巡拜第五十一番の靈場にして天平元年三月越智玉澄之を再建すと傳へらる、昔は安養寺と稱し法相宗なりしが後石手寺と改め眞言宗に轉ぜり、本堂、三重塔、仁王門、鐘樓竝に梵鐘は何れも國寶に指定せらる、之等の建造物は鎌倉期のものならんと稱すれ共同寺所藏の棟札には文明十二年又鐘銘には建長三年の如くあり。

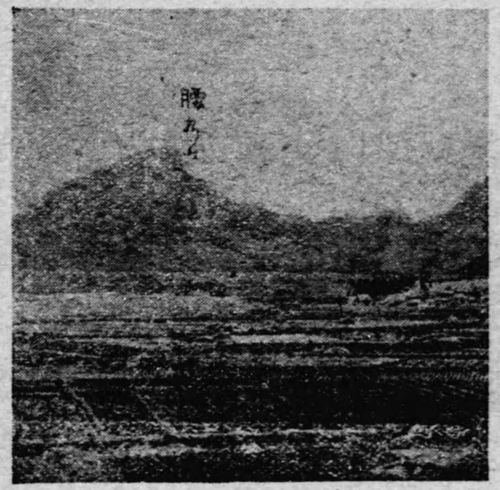
荏原城趾　温泉郡荏原村大字惠原町字堀前に在り一名平岡城又は棚居城と謂ふ古城にして面積一町四段九畝十五歩あり、伊豫の主權者河野家十八將の首位たる平岡氏の居址にして天正十三年九月豐臣氏の四國征伐の時落城す、其の時の城主を還江守通倚とす、慶長五年九月平岡善兵時の領主加藤嘉明に反し一揆の首謀となりて此城に據れり、戰國時代の地城通稱土居(邸宅)の址にして完全に當時の形狀構造を存する縣下唯一の標本なり、現在は邸址たる平坦地は全部畑となり其の内東北隅は杉林となり西北隅は竹藪なり入口の門址は田となれり、入口の一部を除く外土封を廻らし土封上は大小樹木雜生す堀は殆ど存し其の八分の一のみ田地となれり。

星の岡　温泉郡石井村に在り、五つの丘陵より成り里人之を五つヶ森と呼ぶ、元弘年間後醍醐天皇兵を擧げて北條氏を滅ぼさんとし給ひし時、河野の一族土居通増(現温泉郡石井村南土居に居る)得能通綱(現周桑郡德田村得能に居る)の兩人は同族重見通宗竝に忽那義範、村上義弘等と義兵を擧げぬ、尊で北條時直の大軍を率ゐて來り攻すに際し之を星の岡に打ち破りたり、實に元弘三年三月十二日の事にして世に之を星の岡の戰と稱す、今頂上に一碑を建て星之岡忠碑と銘せり。

【道後公園】

道後公園　往古伊佐庭岡と稱し推古天皇の朝聖德太子行啓せられ道後温泉の碑を建てさせ給ひしは此丘上ならんといふ、建武年間伊豫の豪族河野通盛湯築城を築きてより天正十三年其の滅亡に至るまで其の居城となせり、天正十五年福島正則湯築へ入城せしも幾許もなく國府に移り湯築は永く廢墟となる、然るに慶長年間加藤嘉明勝山城を築くに際し其の礎石等を取りて之を移して築城の用に供したるを以て全く廢墟となり久しく荒廢して竹藪なりしを縣が明治十九年拂下を受けて之を改修して同二十一年六月本縣公園とし以て現今に至る、園の周圍八町二十間餘面積二万九千八十三坪中央に小丘あり櫻樹最も多く花季の殷賑地方に冠たり、丘頂四望廣濶遠く瀬戸内海の絶景、近く市坊悉く眼下に在り。

三津の朝市　温泉郡三津濱町の三津濱港に在り古來有名なる魚市場にして其の創業は遠く元和二年の昔にありと謂ふ、毎朝生魚各地より參集し取引極めて敏活にして群集せる漁夫商人は千を以て數ふべく加ふるに近來果物蔬菜の市も同時に開設せられ其の狀實に壯觀を極む。



【山折腰】

【エヒメアヤメ】

エヒメアヤメ　温泉郡難波村大字下難波腰折山に產す、鳶尾科に屬する多年生草木なり、小形にして叢生す根莖は細く稍扁平にして瘠形なり、葉は線形銳尖頭にして其の質薄く禾木科植物の葉に類似す、長さは三四寸のもの多く八、九寸を超ゆるもの鮮し、されど之を培養する時は著しく伸長する場合多し。

葉片には細き縱脈二、三條あれども著しからず、三月中旬より鐮合せる葉を地上に出す、四月中旬の花時に葉は尙長からず。

三月末より四月の始に亘りて三、四寸の花莖を抽出し其の頂に一花を着し、一枚の苞ありて花を包み花梗は甚だ短く、二、三分なり、花蓋の管狀部は細長にして一寸乃至一寸七、八分瓣部は紫色にして旗片は狹き花瓜を具ふ、雄蕊の葯は線形を爲し花糸は纖細にして葯よりも長し、雌蕊の冠狀片に薄くして直立し線狀披針形、鈍頭又は銳頭をなし子房は長楕圓形にして鈍なる三稜を有し花後圓き蒴を結ぶ。

【石手川】

石手川及重信川堤防並木

温泉郡湯山村、道後湯之町、桑原村、石井村、余土村、垣生村、伊豫郡岡田村、松山市に在り石手川流路岩堰より出合迄と及重信川流路出合以下流末迄三里三町三十間の間保存せらる石手川の沿革を見るに石手川は源を温泉越智二郡の境上南三方森に發し温泉郡湯の山溪間の諸流を集め道後湯之町大字石手字岩堰に至り（以下舊流路）夫より北に寄り石手寺の前を流れ湯築城の南方を過ぎ持田の中央を一貫し松山市玉川町に入り二番町及八股を通り妙清寺竝松山驛邊を經過し田畦の間を西走して温泉郡生石村吉田濱に至りて海に注げり、慶長五年加藤嘉明勝山に築城せんとするに當り石手川の流路變更する事となり老臣足立重信をして岩堰の岩石百三十間の開鑿行ひ其れより西南に向ひて流路を穿ち市ノ坪に至り重信川に合流せしむ、依て此處を出合と謂ひ此開鑿流路二里三十間工事施行は慶長六七年の交と想はる、重信川は元浮穴村大字高井より南に偏方し丘陵に沿ふて流れ西南に向て斜走し松前の南海に注ぎしが水害絶へざるに準り慶長元年前後に之を變更穿鑿し高井以下垣生村に至て海に入る迄殆むど直線となす此の流路三里なり、出合より流末迄一里二町の長さを有す、石手川流路變更により松山市は作られ松山城は築かれ多くの田園は開かれ灌漑は至便となり水害は減少す、然れ共今日蜿蜒として長龍の横はるが如き堤塘樹林欝蒼として繁茂し氣候を調節し風土を保ち絶好の美觀恰も繪畫の如く常に文人墨客の雅懷に觸れ或は吟詠に上り繪畫となり地方人共樂の場所として四時人の絶ゆることなきは之自然の美を語るものなり、並木の一部は石手川公園として松山市の管理に屬す。

【來島海峽の眺望】

越智郡勢

面積戸口—面積　二八方里五〇四　世帶數　二五、六九二

人口　一一八、四七七

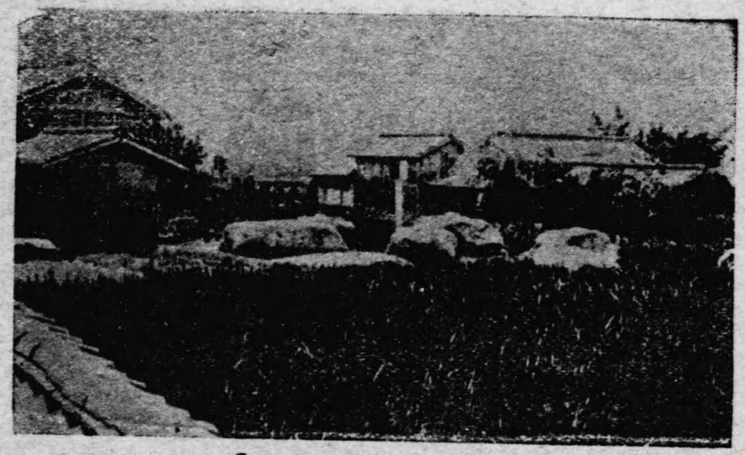
重要生產物—米　三、八三四、二三九圓　麥　二、〇八二、八五五圓　鹽　九八五、六四二圓　漆器　一三四、七〇〇圓　瓦　三四三、八五七圓　生糸　七六三、八一一圓

諸學校—縣立弓削商船學校、町立菊間實科女學校、町村立青年學校　四七、小學校　四六、私立伊豫教員養成所、私立小學校　一

名所舊蹟—國幣大社大山祇神社、御陵墓傳說地、綱敷天滿神社、脇屋義助の墓、國分寺の塔礎、法華尼塔礎、波止濱公園、阿方の貝塚、四坂島製鍊所

鐵道—國有鐵道豫讃線伊豫櫻井驛、伊豫富田驛、波止濱驛、伊豫大井驛、伊豫龜岡驛、菊間驛

港——菊間港、波止濱港



【國分寺塔礎石】

國分寺の塔礎　越智郡櫻井町大字國分寺字殿に在り地積二十七坪、國分寺の塔礎は大正十年三月史蹟として內務大臣より指定せらる、聖武天皇天平十三年各州に勅して鎭護國家道場を置き、國分寺と爲せしもの、一にして開墓は本性上人なり當寺は四圍靈場四十九番の札所、古の七重塔は同寺より東二町許りの所に在りしものと見え田の中に大さ六七尺四方の礎石多數殘れり、國分寺創設當時の遺瓦と認むるもの其の附近に埋沒せらる。

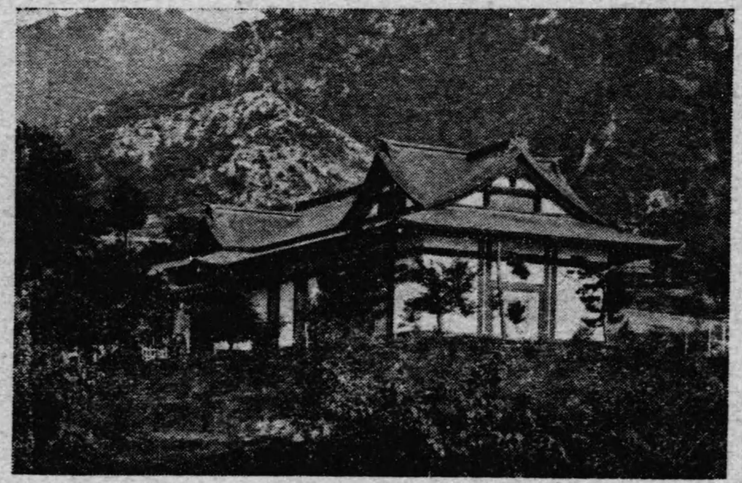
法華尼寺塔礎　越智郡櫻井町大字櫻井字池中に在りて地積二十八坪なり、聖武天皇天平十年各州に勅して國分尼寺を建てしめたるもの法華尼寺なり、塔の礎石と認むべき加工せる花崗岩雜草繁茂せる中に點々殘存せり、其の東南方近くに柿の木自生し其の幹根に土石を堆積する中に布目瓦の破片多數散在せるを見る。

阿方の貝塚　越智郡乃万村大字阿方字池尻に在りて其の地積九段一畝二十九歩海邊を距ること約二十三四町一帶に貝殼、土器、石器を藏す、今田と畑となり其の中間に里道あり田畑表面に貝殼及貝塚土器破片一帶に散布せるにより此地を從來貝殼田と稱す之を發掘すれば土器、石器、貝器、骨器、魚の骨多く出づ、此の地を十餘町にして式內大社野間神社(縣社)あり近邊に古墳多々あるより察するに先史時代より有史時代にかけて文化の進歩せし地方なりしなるべし。

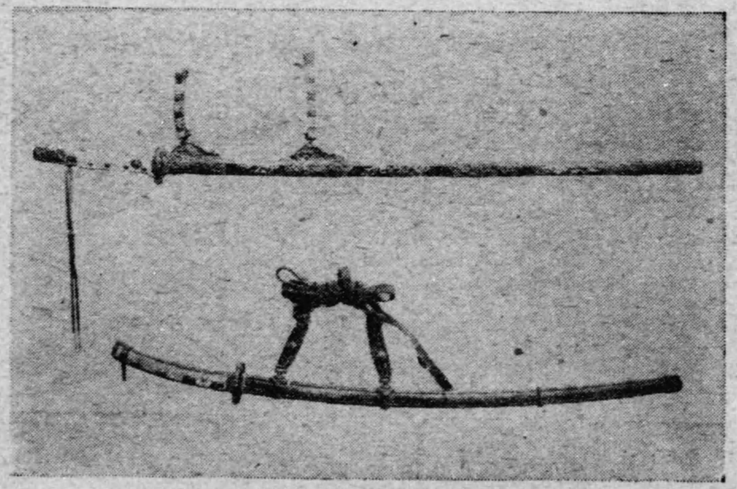
鴨屋義助の墓　越智郡櫻井町大字國分寺谷の口に在り、地積四畝九歩にして元の墓石は十四個の五輪塔なり、其の墓石と思考せらるゝ十四個の五輪塔は破壞して僅に面影を止むるのみ、寬文九年再建のものは碑高三尺二寸、周圍五尺、圓柱狀石二尺五寸、臺石垣方一丈、高さ二尺五寸なり、義助は通稱次郎新田義貞の弟なり、義貞と共に北條高時を亡ぼして尊て足利氏と戰ひ功に依りて右衞門佐を拜し昇殿を聽さる、湊川の敗戰後官軍振はず義助悪戰苦鬪生死の間を出沒して苦節を守る、其後功によりて刑部卿を拜す、興國三年四月伊豫の人兵を起し統帥を奉請するや義助四國總大將として今治浦に抵り國府に居る、之より官軍威大に振ひしが五月十一日病みて卒す、明治三十六年八月特旨を以て從三位を贈らる。

【大山祇神社】

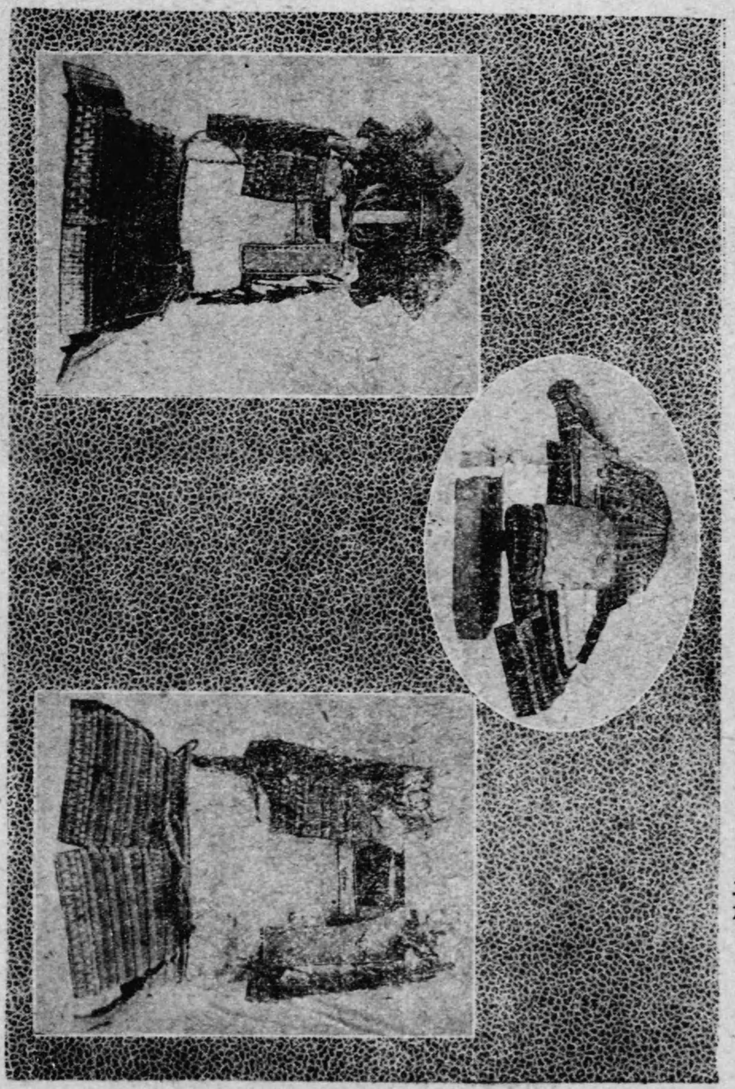
大山祇神社　越智郡宮浦村に在り、國幣大社にして大山祇命を鎭齋す、日本總鎭守と唱へ、上皇室の御尊崇篤く、下武門武將を始め地方民の崇敬極めて深厚なるものあり、元亨二年（六百十餘年前）兵燹火に罹り、天授四年（五百五十餘年前）造營せらる、現今の本殿卽ち是にして、國寶たり、本社所藏の寶物尠からず國寶百十四點を藏す、其の內最優秀なるものは甲冑にして各年代を逐うて系統的に保有せられたる點に於ては他に比儔を見ざる處なりと云ふ。



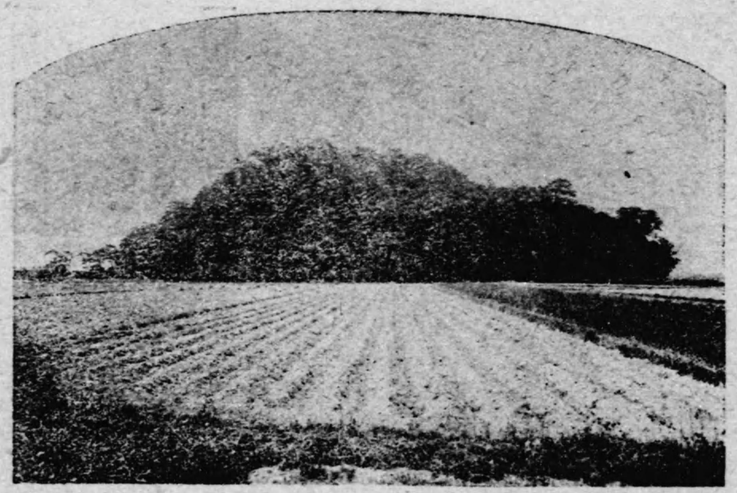
【大山祇神社國寶館】



【大山祇神社所藏國寶螺鈿飾太刀兵庫鎖太刀】



【點三寶國藏所社神祇山大】



【福岡八幡の社叢】

周桑郡勢

面積戸口—面積　一九方里二九五　世帶數　九、八五四

人口　五〇、〇六五

重要生產物—米　三、三一三、三〇一圓　麥　九八五、九〇二圓　清酒　七三四、二二〇圓

諸官衙—壬生川警察署、農產物檢查所丹原支所、種畜場、丹原土木出張所

諸學校—縣立周桑高等女學校、組合立小松實科女學校、町村立青年學校　一九、小學校　二二

名所舊蹟—大舘氏明の墓、興隆寺

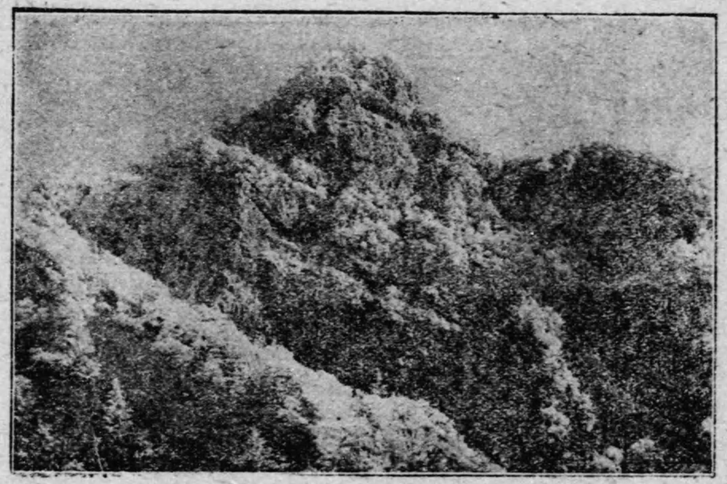
鐵道—國有鐵道豫讃線伊豫小松驛、壬生川驛、伊豫三芳驛

港——壬生川港

福岡八幡神社の社叢　周桑郡丹原町大字今井字池ヶ脇に在り神社境内及山林合して面積八段八畝六歩を占め社叢は海抜約六十米の丘陵にして全く平野中に鬱蒼として孤在す、頂上に小平地あり社殿を構へて福岡八幡大神を奉祀し其の西北麓には生木地藏尊を奉安す、本社叢は森林學上暖帶の固有要素を有し暖帶森林の代表として學術上の考證を得ること多大なり又大に交通の便を得たるを以て學徒研究者に徒勞を省くこと多し。

大舘氏明之墓　周桑郡楠河村大字永納山の内世田山城墟梅檀寺の境内に在り地積四段二畝二十八歩にして五輪塔一基、花崗岩高さ二尺一寸、幅六寸、厚五寸、天保八年再建大舘氏明之墓碑一基、殉死者十七人の墓碑銘一基あり、墓碑銘に大舘伊豫守源氏明朝臣之墓背側に墓誌を刻するは天保八年三月氏明十七代孫大舘謙堂氏晴謹誌殉死者の碑に大舘氏明らに殉死せし諸士十七士の名と銘を刻するは天保八年三月西條臣馬彦銘併錄せるなり、五輪塔は國分寺の脇屋義助の墓のものと同形同時代なり。大舘左馬之助氏明は建武年間朝命を以て伊豫守に任じ當國に下り世田山城に據り勤王の兵を徴ふし阿讃を衝へんとす興國三年脇屋義助病歿するや足利の將細川賴春來り攻む八月二十四日より包圍せられ城中糧竭き力耗へ能く拒む能はず九月三日拂曉氏明手兵十七騎を提げ城を出て突撃し大に賊兵を郤け還て一同割腹して死す大正四年十一月十日特旨を以て正四位を追贈せらる。

【大舘氏明之塔】



【西冠嶽】

西冠嶽　周桑郡千足山村大平奥高瀑溪谷上に屹立す石槌山系の王座にして海抜一、九二〇米西北面は稀有の巨岩にて冬期白銀の鎧ほこりて清靈の山容頗る崇高なり。

赤ノベラ　周桑郡千足山村字大平高瀑溪谷に在り幽溪の河床一面の赤色を呈せる平岩盤より成り依つて赤ノベラの稱あり眞に幽邃靜雅言語に絕せり。

【興隆寺三重之塔】

興隆寺

周桑郡德田村大字古田の西山に在り佛法山興隆寺と稱し眞言宗醍醐派に屬する空鉢上人の開基にして本尊は行基菩薩の作と傳ふ延曆年間報恩大師伽藍を造營し後文治三年源賴朝本堂を建造せり、現在の本堂之にして國寶たり、鐘樓の銅鐘は弘安九年鑄造にして國寶たり、境內幽邃にして境地を流るる、西山川の溪谷に架せる御由流宜橋は昔弘法大師來錫し

御佛の法の御山の法の水
流れも清き御由流宜の橋

と詠せりと傳へ其の名あり地方の古刹として四時賽客絕えず。

【石槌山天狗巖】

新居郡勢

面積戶口—面積　二五方里〇〇六　世帶數　二二、二八七　人口　一〇九、七五四

重要生產物—米　二、四八五、五四四圓　捺染物　六四七、六二八圓　綿織物　一、一〇〇、一七八圓　製紙　六六八、二二九圓

諸官衙—西條警察署、角野警察署、新居稅務署、西條營林署、西條區裁判所、松山刑務所西條支所、西條土木出張所、蠶業取締所西條支所、農產物檢查所西條支所、西條財務出張所、木炭檢查所西條支所

諸學校—縣立西條中學校、西條高等女學校、西條農業學校、新居濱農工學校、町立新居濱高等女學校、町村立青年學校　二六、小學校　二五、私立小學校、一、幼稚園　二

名所舊蹟—石槌神社、伊曾乃神社、武丈の櫻、別子銅山

鐵道—國有鐵道讃線多喜濱驛、新居濱驛、中萩驛、伊豫西條驛、石槌山驛

港——新居濱港、西條港

【伊苔乃神社】

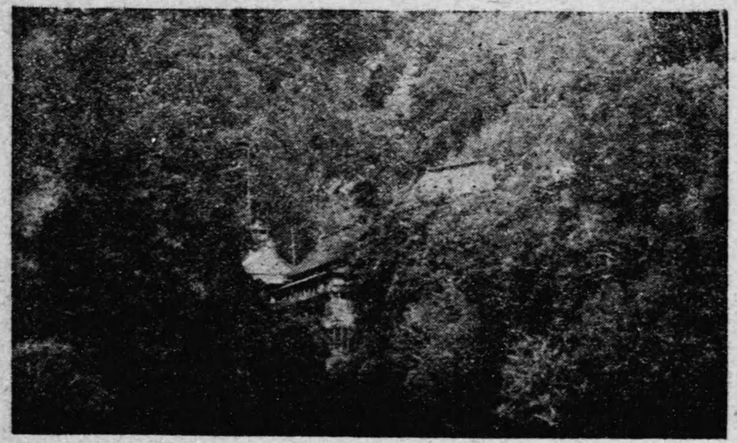
伊苔乃神社　新居郡神戸村大字中野に在り、天照大神を祭る延喜式内名神社にして成務天皇の御鎭齋に係り御由緒最も正しく天平神護二年以來屢々御神位を進められ現今正一位なり、崇德天皇讃岐より伊豫の湯の濱幸の時天王に行宮を作り一七日御參拜あり其の時宸筆の額を二の鳥居に掛けさせ給ひしが今も尙ほ存せり、天正の亂に社殿兵火にかゝりしを元祿年間再建す境内は幽邃森嚴にして神威赫灼地方民の崇敬極めて厚し。

【石鎚善者ノ森】

八月の交白衣の行者員の音を立て金剛杖を携へ登山す、其の數毎年數万に及び一大偉觀を呈す。

石槌神社　新居郡大保木村に在り、海拔六千五百三十七尺、四國最高の石槌山の絕頂に祭る、祭神石土毘古命にして、役行者始めて瓶ヶ森の山頂に神佛混淆の一社を建て石槌藏王權現と號せしが維新の後神さし祭り石槌神社と改稱す、明治五年縣社に列す、毎年七、

あつけしさう　新居郡多喜濱村大字黑島字三喜澤堀塘の約二百間池沼約十歩の處に生育す三喜濱鹽田の一部を舊西條藩主松平家が竣成せしは慶應三年十二月三日なり「あつけしさう」の生ぜしは素より其の後に屬すべし大正元年八月岡本道良氏初て之を發見す、黍科に屬する一年生草木にして高さ數寸乃至一尺許葉なし綠色の莖は節多く多肉質にして棒狀をなし多くの枝椏を生ず鹽地にのみ簇生するものなり、あつけしさう屬の植物は其の形態の奇拔なるのみならず形態學解剖學上種々面白き點あるにより植物學實驗室內には殆ど缺ぐべからざるもの〻一にして歐洲に留學するものは實驗用とするのみにても毎年之を手にせざるものなしと云ふ、世界に於ける此屬の植物には數種ありその産地は亞西亞の北部西部印度、阿弗利加の北部、北米等なり我國に於て最初發見されたるは北海道釧路國厚岸（アックシ）の牡蠣島にして明治二十四年のことなり發見者は椙山清利氏さす、理學博士宮部金吾氏其の産地に因みて和名を「あつけしさう」と附せり我國の分布は二ヶ所にして相距つること甚だ遠し。



【仙龍寺全景】

宇摩郡勢

面積戸口―面積　三二方里二九三　世帶數　一四、八九三　人口　七三、一八七

重要生產物―米　二、〇三一、三七〇圓　紙　五、一七〇、六一八圓　他ニ金、銀、銅ヲ產ス

諸官衙―三島警察署、農產物檢查所三島支所

諸學校―縣立三島中學校、川之江高等女學校、宇摩實業學校、町立三島高等女學校、町村立青年學校　三四、小學校　三六、幼稚園　二

名所舊蹟―御陵墓參考地、仙龍寺、大柏（松柏村）

鐵道―國有鐵道豫讃線川之江驛、省營バス、（川池線起點）伊豫三島驛、伊豫寒川驛、伊豫土居驛

港―――川之江港、三島港

（ビヤクシン）

仙龍寺　宇摩郡新立村銅山川の左岸に沿ひ東西北の三面山を以て圍まれ老杉、古木蓊鬱として晝尙暗く奇巖、怪石屹立重疊せる一大岩壁の下に在りて飛瀑輕々四時ともに滿山の風光最も秀麗にして幽邃閑雅の仙境なり弘法大師前後二回登臨修法後弘仁五年大師四十二歲の時自ら其の像を刻して此の地に安置したりと、現今安置する本尊是なり寺の西北約四丁にして清瀧あり懸涯百餘尺四時水の絕ゆることなく壯觀を極む。

ビヤクシン　宇摩郡松柏村大字下柏字柏槇に在り、本樹の覆へる面積二畝十五步、實に巨大なる老樹にして沃野を通ずる道路の交叉點に獨在す、而して樹幹は縱裂せる赤褐色の樹皮にて被はれ殆ど圓柱狀をなし多少の傾斜をなして直立す、地上十三尺に至りて漸く枝を分つを以て主幹は頗る明瞭に暴露せらる、其の周圍（地上より五尺にて）を計るに二十四尺七寸、高さ四十五尺、樹冠粗半球狀を呈し枝葉克く繁茂せる本邦稀有の大樹なり、元來本樹の成長は極めて遲緩なるより觀て其の樹齡の多きこと推して知るべし、本樹の東北の一側に小空洞あり、天明三年頃此處に小き地藏尊藏を安置す、そは樹齡の永からんことを祈りたるものなりと云ふ、大正十三年十二月天然記念物として內務大臣より指定せらる。

【關　門】

上浮穴郡勢

面積戸口―面積　五一方里八四〇

世帶數　八、五六七

人口　四〇、三〇八

重要生產物―米　九〇六、一七四圓

木材　四〇三、九一三圓

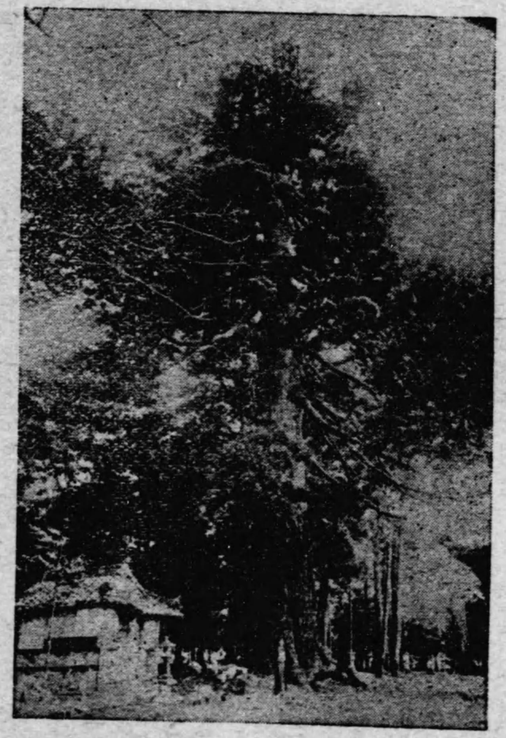
諸官衙―久万警察署、久万營林署、農產物檢查所久万支所、鹽業取締所久万支所

諸學校―町村立青年學校　二七、

小學校　二八

省營バス豫土線久万停留場

名所舊蹟―面河溪、岩屋寺、御三戸



【大　杉】

大　杉　宇摩郡寒川村鄉社石戸八幡神社の境内に在り樹高約三十間、初枝迄高さ一丈七尺、目通廻り三丈、根元廻り三丈三尺にして枝張周圍各一丈八尺に及ぶ、樹勢尙旺盛なるも明治三十五年頃梢端四五の枝枯損せるのみなりしに最近には煙害の爲なるや其の枯損を增せり、通俗に高野杉と稱し上古氏神寒川神社鎭座當時のものたるや由緒年代より考察するに一千百餘年を經過せる老樹なり。

御陵墓參考地　宇摩郡妻鳥村に在り允恭天皇第一皇子木梨輕太子南國御下降の際當地の海岸に漂着し後此地に薨去遊ばされたる爲同村東宮山に葬りたりと傳ふ明治二十九年七月三十日御陵參考地となる。

【蓬萊溪】

面河溪　上浮穴郡面河村大字大味川に在り、四國の霊峰石槌山に源を發する面河川の上流延長約五千米に渉る沿岸一帶と其の支流鐵砲石川とを併せたる峽谷にして僅に西南に決裂ありて水を流す、斷崖絶壁隨所に屹立し、其の大部分堅緻にして粗き節理を有せる石英閃綠岩より成り、溪間至る處奇岩壁立聳峙して形態千差萬別頗る岩石美に富む、滿山千古斧鉞を加へざる老樹欝蒼として天に聳え、晝猶闇く清冽凍るが如き清流滾々として流れ、淀みては淵となり激しては瀑布を作り、深潭碧淵相交錯して景觀の變化頗る巧妙を極む、實に面河は大森林の壯美と奇岩の快絶に更に清流の明眉を加へたる幽邃壯嚴神祕の極致を盡したる溪谷の一大偉觀にして眞に天下の山境たり、溪中勝ならざるはなし其の代表的なるものを擧ぐれば、本流に於て關門、五色河原、龜腹、蓬萊溪、紅葉河原、下熊淵、虎ヶ瀧、霧迫瀧、御來光瀧等にして鐵砲石川方面に於ては パノラマ臺、櫃ノ底、御月岩、兜岩、鏡岩、布引瀧、鬪鼠淵、奥の櫃等なり。

勝地は松山を距ること十五里餘にして久万町より面河村栃原迄自動車を通ず、關門迄通ずるも亦遠からざるべし。

【岩屋寺全景】

岩屋寺

仕七川村大字七鳥に在り弘仁六年空海の開基と稱せらる、海岩山岩屋寺と號す、此地深山幽谷にして岩石突兀たる巖峰雲表に聳ゆ斷崖絶壁の間處々に岩洞を作り奇岩怪石多し、巖壁の特に大なるものを蘆原丘、不拾巖、白山、鈴嶽、高祖丘、古岩、龍女峰等と稱す此の外尙奇巖多く胎内潜りには十六階、二十一階の梯子を架す、又奥の院は洞窟深く觀音像を藏むるも窟中暗黑にして之を拜するもの松明を照す、古岩屋亦奇勝の地にして岩柱二三雲を凌ぎて聳立するなど實に縣下の名勝地たり、四國靈場四十五番の札所なり。

【大公孫樹】

中川の大公孫樹

上浮穴郡參川村大字中川鎌土の村社三島神社境內入口西南隅に在り樹木保護區域は三十坪にして樹幹根廻四十五尺、第一分枝點南側地上五尺北側四尺此の分枝點の廻四十二尺、高さ百八尺、枝張周圍各三十五尺のもの一本なり、樹齢約一千年と傳へ樹勢尚旺盛にして樹幹所々に乳枝を生じ奇形を爲す、地方遠近の者此の乳枝を迷信し其の神社を乳の神として信仰するもの北海道、九州、四國に亘り賽客頗る多し。

龍泉洞

岩洞は浮穴村小屋の南方山腹に在りて深さ四町四十八間、支洞一町三十間あり、洞內鐘乳森然として倒に垂る。

八釜の甌穴群

上浮穴郡柳谷村大字柳井川に在り、面河川の支流黒川の河床をなせる堅硬なるフリント質角岩上に大小三十餘個の甌穴を生じたるものなり、甌穴群は凡四群に分つべく第一群は川の左岸に沿うて八個一列をなし深き溝により相連續し、各穴間小瀑を懸く甌穴は其の湯壺に當れり、是れ八釜の名の起りし所以なり、第二群は河床の中央にありて五個相連なり、第三群は其の右にありて七個、第四群は最右岸に近く三個相連なる、其の他孤立せる數個の甌穴あり、甌穴の最大なるものは横徑九乃至十二メートル、深さ約十二メートルなり、かく多數の甌穴が相密接して一群をなせるは極めて稀に見る所なり。

昭和九年天然記念物として指定せらる。

【砥部陶器工場】

伊豫郡勢

面積戶口—面積 二一方里七七一　世帶 一三、二七七

人口 六五、〇二二

重要生產物—米 二、九四六、〇六九圓　陶磁器 三五四、七四〇圓　漁獲物 三九七、二四一圓　木材 八〇二、四二一圓

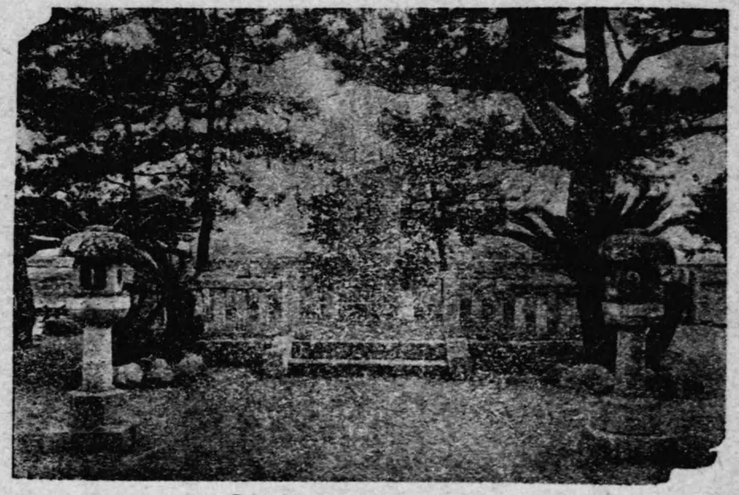
諸官衙—郡中警察署、農產物檢查所郡中支所

諸學校—縣立伊豫實業學校、町村立青年學校二〇、小學校 二三

名所舊蹟—義農作兵衛の墓、大森彦七の史蹟、八幡の森

鐵道—國有鐵道讃線北伊豫驛、南郡中驛、伊豫上灘驛、下灘驛、私設—伊豫鐵道、松山郡中間

港——郡中港



【義農作兵衛記念碑】

義農作兵衛之墓

伊豫郡松前町大字筒井義農に在り、墓碑は安永五年六月藩廳之を建てしものなり、記念碑は大正元年之を建設す。

農夫作兵衛は享保十七年大飢饉に際し松山藩は蝗害最も多く死亡四千七百人に達し、筒井部落のみにても八百一人を算したり、作兵衛は唯耕作にのみ努力せしが天災には勝ち難く其の父作平其の長男作市相次で餓死したり、作兵衛屈せず三歳の幼女を眷に擔て田に出で餓に迫られて昏倒し僅に隣保の人の肩に依りて家に歸りしが猶一粒の麥種を枕として遂に餓死を遂げたり、實に享保十七年九月二十三日、年四十六歳なりき、後人之を義農として崇敬す。

【大洲町全景】

書參郡勢

面積　戸口―面積　三五方里〇三四　世帶　一八、五三八

人口　八七、一三五

重要生產物―繭　一、三六七、七五二圓　米　一、六〇〇、九九五圓　木材　五八二、八六九圓　生糸　四、二一三、六九七圓

諸官衙―大洲警察署、內子警察署、大洲稅務署、大洲區裁判所、大洲土木出張所、蠶業取締所大洲支所、農產物檢查所大洲支所、大洲財務出張所、蠶業試驗場、木炭檢查所大洲支所、職業紹介所大洲出張所

諸學校―縣立大洲中學校、大洲高等女學校、町立內子實科女學校、組合立高等農業專習學校　一、町村立青年學校　三八、小學校　三九、幼稚園　一

名所舊蹟―大洲城趾、臥龍、中江藤樹邸趾、出石寺

鐵道―豫讃線喜多灘、伊豫平野間及大洲、內子間

港――長濱港

八幡の森

伊豫郡郡中村大字上吾川字宮の前に在る古墳面積は一町七段七畝歩にして伊豫岡八幡神社の境內なり、社地內に社殿、本殿、幣殿、神門什器納所及末社小祠等十二あり、古墳は社殿の周圍に七個あり內一個半壞す、而して古墳七個の內二個は完全に保存せられ原形を變せず一個半壞のもの、何れも發掘の跡なし境內は樹木繁茂して美觀を呈す、境內末社五瀨神社の中に嚴靈八森神社と稱するものあり、古墳を祭りたるものなるべし　八幡神社は後世之に遷祀したるなり。

讃章記に伊豫皇子御來處を伊豫郡神崎庄と號し今靈宮と申し親王宮と崇奉す卽當家義祖の宗廟神也件の宮の　南十八町山腰に皇子御陵あり臣下多く死して隨へり寶玉を陵とす天子の廟に似たり　仍て今岡又は今岡玉子と號す云々とあり伊豫皇子は速後上命なるべし伊豫岡と今岡又は今靈宮と嚴靈と相似たり、神崎の南十七八町の山腹南伊豫村大字上野字今岡に今岡宮あり形勝の地にして頂上に一大古墳の跡あり　山腹より山麓にも多數の古墳の趾あり發掘破壞せられたれども今尙土器の破片を出し又今岡の少しく西に上野字鬼渡護の古墳あり數多の　金銀環切子玉劍及普及の祓部玉類を出せり故に伊豫皇子の御陵さいふもの何れか遠斷すべからず。

【中江藤樹邸趾】

中江藤樹邸趾

喜多郡大洲町大字大洲、縣立大洲中學校の敷地内にあり、邸趾は面積二百九十八坪之が一部を庭園となし、明治四十三年同校友會は其の中央に記念碑を建て、大正十一年先生愛用の井戸を整理して「中江の水」と稱し亦記念碑を建つ、斯くして其の遺風を偲び且該校訓育の資料とせり。

藤樹先生其の祖父吉長に伴はれて大洲に來りしは元和三年十歳の時にして之より寛永十一年二十七の時まで大洲に住し、此の地に居住せられ其の堰井戸の水は飲用に供せられしと云ふ、當時大洲の俗戰國の氣風を承け、武を尚び文を卑みければ、先生書は武を講じ夜は書を讀み、文武共に造詣する處多し、先生祖父吉長に養はれて嗣子となりし爲、食祿百石を繼ぎて泰興侯に奉仕す、されど祖母、祖父竝に生父を喪ひし先生は母を思ひて已まず、遂に意を決して官を棄て去る、實に寛永十一年先生二十七歳の時なり。

【出石寺護摩堂】

出石寺

喜多郡大和村矢野の金山の絕頂に在り人皇四十四代元正天皇の御宇養老二年六月十七日の曉より此山震動すること數日村民其の由を量り知ることなく只異香暗に薫し光明赫灼たり時に一人の獵師鹿を追て此の山に入る然るに地裂け巖開けて千手觀音、地藏尊の二菩薩の靈像自然に湧出し給ふを拜し身心恍惚として爲す所を知らず念ち發心して弓矢を捨て妻子を離れ剃髪染衣して名を道教と改め本尊の禮拜供養を怠ることなく遂に草堂を建て靈峯山出石寺と號すれば世に「ハエヌケ」尊像と稱する所以なり其の後大同二年弘法大師四國巡錫の砌此山に登り山號を金山と改め自ら本尊竝不動、愛染、日光、月光の脇立を彫刻して修業せられしと云ふ當時の銅鐘は國寶なり或は藤堂高虎の朝鮮役分捕品の奉納とも或は八幡船の奉納とも云ふ。

【三瓶港全景】

西宇和郡勢

面積戸口—面積　一四方里八八二　世帶數　一四、九六六

人口　七〇、二八五

重要生產物—綿織物　八、一六三、九八九圓　繭　一、二五六、八四八圓　生糸　一、〇七〇、八八八圓　柑橘　二一四、九九五圓

諸學校—町村立青年學校　三二、小學校　三二、私立第二山下高等女學校、實踐農業學校、幼稚園　一

名所舊蹟—佐田岬

鐵道—國有鐵道豫讃線平野驛、千丈驛

港——川之石港、三瓶港

佐田岬は本縣に於ける岬角中最も長く、西宇和郡三崎村外五箇村を包擁して海面に突出すること實に十二里に及び豊豫海峽を距て、大分縣佐賀關と相對す海上僅に七里に過ぎず、三机村鹽成と三机とに跨り三崎半島を横斷せんとする鹽成の堀切あり　慶長年間板島城主富田信濃守之が掘鑿を企てたれども事志と違ひて成らず却て國除の一因となれりと云ひ傳ふ、佐田岬の端部に近く三崎村あり天然記念物として内務大臣指定の赤榕樹あり。

赤榕樹

西宇和郡三崎村大字三崎字カワノモト及シミズに在り、而積二畝二十三歩の所に生育旺なり、大正十年天然記念物として内務大臣より指定せられたり。

樹高	六間	廻	一丈　一本
樹高	五間	廻	九尺　一本
樹高	八間	廻	一丈二尺　一本
樹高	四間	廻	五尺　一本
樹高	八間	廻	一丈五尺　一本
樹高	三間	廻	八尺　一本
樹高	二間半	廻	八尺五寸　一本なり

【法華津峠】

東宇和郡勢

面積戸口—面積　二九方里六〇〇　世帶數　一二、七二七
人口　五九、一〇一

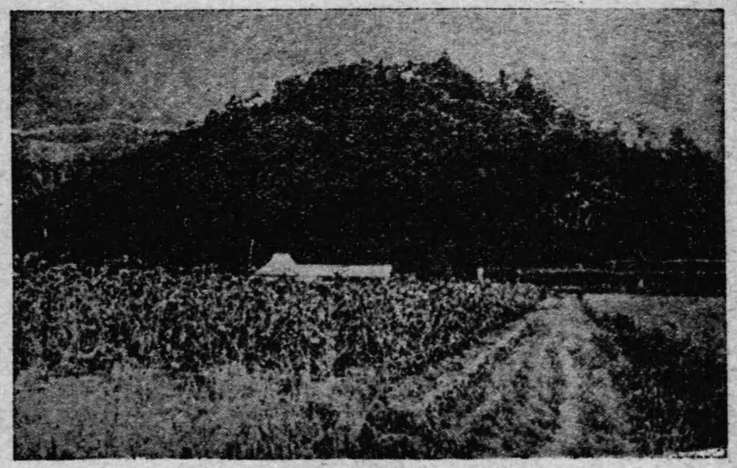
重要生產物—繭　一、七一二、一一九圓　米一、九三六、三四
一圓　生糸　一、〇七九、〇四四圓

諸官衙—卯之町警察署、野村警察署、卯之町稅務署、
蠶業取締所宇和支所、農產物檢査所卯之町支所、卯之町
財務出張所、職業紹介所宇和出張所

諸學校—縣立宇和農業學校、東宇和高等女學校、町村
立青年學校　二〇、町村立小學校　二九、幼稚園　一

名所舊蹟—小森の瓢塚、松葉城趾、法華津峠
省營バス南豫線（近永、魚成橋間終點）

港——俵津港



【小森の瓢塚近望の景】

小森の瓢塚

東宇和郡石城村大字山田字粟尻に在り、三段三畝十二歩の地積を占め前方後圓式古墳にして外圓長五十四間、幅二十間、內圓長四十八間、幅十三間、高さ後圓十二尺、前方十尺の一大古墳なり、（陪塚四個內前方の左右にあるもの圓墳二個、徑六尺、高さ三尺、後圓に屬する二個は半ば除去したるものゝ如く形狀定かならず）此墳は戰國時代の防衛地と爲したるものと思ほしく墳上削平せられ其の後數次墳上を耕して畑作なしたるものなり又墳の周圍を切り取りたるものと見ゆ然れ共大體に於て完全なり、今や墳域草木雜生せり、宇和の主權者宇和津彥命を葬りたる所と云ふ、又一說には國木長者の墳塋なりと云ふ、國木長者は石城村字國木に住したる大富豪にして宇和町大字小野田の極樂寺を創立したる人なりと傳ふ。

松葉城趾

東宇和郡宇和町大字下松葉に在り海拔四百四十七米往古岩瀨城と稱し西園寺累代茲に居り威を南海に振ひし處山頂平坦にして數千を容るべく又前面に宇和盆地を瞰下し頗る形勝に富み行遊地として四時節を曳く者多し。

北宇和郡清滿村大字岩淵字風呂の奥口滿願寺境內に在り、柿の木の覆へる面積十坪にして樹の周圍凡三尺、樹高五間の一本樹にして餘り果實を多產せざるもの、如し、果實の形狀は稍々扁平尖柿に屬す、種子極めて少く形不正なり。本株に成育せる果實は概ね果實內中軸をなせる珠座の上端より更に小果實（此れを第一內果實と稱す）を生ずるを普通とし或る場合には第一內果實の中軸をなせる珠座の先端に更に小果實（此れを第二內果實と稱す）を生じ時としては尙第三第四を生ずることあり、種子は不正形にして縱に數個の稜角を有し發芽力充分なり第一內果實も原始的種子を生ずる事あれ共概ね不完全なり、本種に相當すと認むるものを產する本邦分布を見るに靜岡縣、島根縣、石川縣、廣島縣等あり多少似たれ共全然一致すと認むること能はざるものなり。

北宇和郡

面積戶口—面積　四八方里一八二　世帶數　一八、六九八

人口　九四、七九一

重要生產物—繭　二、九四〇、三九七圓　米　二、四五三、三八八圓　柑橘　三五三、二〇〇圓　生糸一、七五一、〇八七圓　漁獲物　七五九、三〇四圓

諸官衙—松丸警察署

諸學校—縣立吉田工業學校、北宇和農業學校、私立山下高等女學校、町村立青年學校　三三、小學校　四五、幼稚園　一

名所舊蹟—藤原純友の古蹟

鐵道—國有鐵道宇和島線（宇和島、吉野間）

省營バス南豫線（近永、魚成橋間起點）

港———吉田港

二重柿

藤原純友の古蹟

天慶中伊豫掾藤原純友が不軌を謀り北宇和郡日振島に據る、南海、山陰の諸國を掠め海陸の行路を絕ちて掠奪を擅にし勢焰最も猖獗なりしが官軍の爲に破られ橘遠保の射殺する所なりと云ふ。

南宇和郡勢

面積戶口—面積 一五方里八九 世帶數 七、二八八

人口 三六、三八〇

重要生產物—漁獲物 一、七四二、七六〇圓 米 七七九、

二七四圓 繭 四四七、〇三六圓

諸官衙—御莊財務出張所、御莊警察署

諸學校—縣立南宇和農業學校、町村立青年學校 一七、

小學校 二一

名所舊蹟—觀自在寺

港——深浦港、平城港

【鬪牛】

歷代長官

任命年月日	在職年月	官職	氏名
明治四年十一月十五日	一年四ヶ月	松山縣參事	本山茂任
同五年二月九日		石鐵縣參事	本山茂任
明治四年十一月十五日	一ヶ月	宇和島縣參事	平岡準
明治四年十二月十四日	八ヶ月	宇和島縣權令	間島冬道
同五年六月廿三日		神山縣權令	間島冬道
明治五年七月廿三日	二年五ヶ月	神山縣參事	江木高直
同六年二月二十日		愛媛縣參事	江木高直
明治七年十一月廿四日	三年六ヶ月	愛媛縣權令	岩村高俊
同十一年五月十五日		愛媛縣令	岩村高俊
明治十三年三月八日	七年一ヶ月	愛媛縣令	關新平
同十九年七月十九日		愛媛縣知事	關新平
明治二十年三月八日	一ヶ年	同	藤村紫朗
同廿一年二月廿九日	一年十ヶ月	同	白根專一
同廿二年十二月廿六日	四年一ヶ月	同	勝間田稔
同廿七年一月二十日	三年三ヶ月	同	小牧昌業
同三十年四月七日	八ヶ月	同	寶孝次郎
同三十年十一月十三日	三ヶ月	同	牧朴眞
同卅一年一月廿二日	一ヶ年	同	篠崎五郎
同卅一年十二月廿二日	一年五ヶ月	同	大庭寬一
同卅三年四月廿七日	三年九ヶ月	同	本部泰

14.4
575

昭和十四年三月廿五日 印刷
昭和十四年三月卅一日 發行

愛媛縣總務部統計課

印刷所 松山市一番町七番地ノ七
愛媛縣印刷所

印刷者 松山市矢知町六番地
田所 春繁

明治卅七年 一月廿五日 一年十ヶ月 愛媛縣知事 菅井誠美
同 卅八年十一月十七日 三年九ヶ月 同 安藤謙介
同四十二年 七月三十日 三年六ヶ月 同 伊澤多喜男
大正 元年十二月三十日 三年四ヶ月 同 深町錬太郎
同 五年 四月廿八日 十ヶ月 同 坂田幹太
同 六年 一月廿九日 二年三ヶ月 同 若林賚藏
同 八年 四月十八日 二年二ヶ月 同 馬渡俊雄
同 十年 五月廿七日 三年一ヶ月 同 宮崎通之助
同 十三年 六月廿四日 一年三ヶ月 同 佐竹義文
同 十四年 九月十六日 一年九ヶ月 同 香坂昌康
昭和 二年 五月十七日 一年一ヶ月 同 尾崎勇次郎
同 三年 五月廿五日 一年六ヶ月 同 市村慶三
同 四年十一月 八日 十ヶ月 同 木下信
同 五年 八月廿六日 一年四ヶ月 同 笹井幸一郎
同 六年十二月十八日 七ヶ月 同 久米成夫
同 七年六月二十八日 二年七ヶ月 同 一戸二郎
同 十年一月 十五日 二年六ヶ月 同 大場鑑次郎
同 十二年 七月 七日 二年一ヶ月 同 古川靜夫
同 十四年 七月十五日 現在 同 持永義夫

14.4
575

昭和十四年三月廿五日 印刷
昭和十四年三月卅一日 發行

愛媛縣總務部統計課

松山市一番町七番地ノ七
愛媛縣印刷所

印刷所

松山市矢矧町六番地
田所春繁

印刷者

明治廿七年 一月廿五日 愛媛縣知事 菅井誠美 一年十ヶ月
同 廿八年十一月十七日 同 安藤謙介 三年九ヶ月
同四十二年 七月三十日 同 伊澤多喜男 三年六ヶ月
大正 元年十二月三十日 同 深町錬太郎 三年四ヶ月
同 五年 四月廿八日 同 坂田幹太 十ヶ月
同 六年 一月廿九日 同 若林賚蔵 二年三ヶ月
同 八年 四月十八日 同 馬渡俊雄 二年二ヶ月
同 十年 五月廿七日 同 宮崎通之助 三年一ヶ月
同 十三年 六月廿四日 同 佐竹義文 一年三ヶ月
同 十四年 九月十六日 同 香坂昌康 一年九ヶ月
昭和 二年 五月十七日 同 尾崎勇次郎 一年一ヶ月
同 三年 五月廿五日 同 市村慶三 一年六ヶ月
同 四年十一月 八日 同 木下信 十ヶ月
同 五年 八月廿六日 同 笹井幸一郎 一年四ヶ月
同 六年十二月十八日 同 久米成夫 七ヶ月
同 七年六月二十八日 同 一戸二郎 二年七ヶ月
同 十年一月 十五日 同 大場鑑次郎 二年六ヶ月
同 十二年 七月 七日 同 古川靜夫 二年一ヶ月
同 十四年 七月十五日 同 持永義夫 現在

4.4
575